

9
283

山口富造著

養蜂實驗問答

金澤

菁力堂

065165-000-4

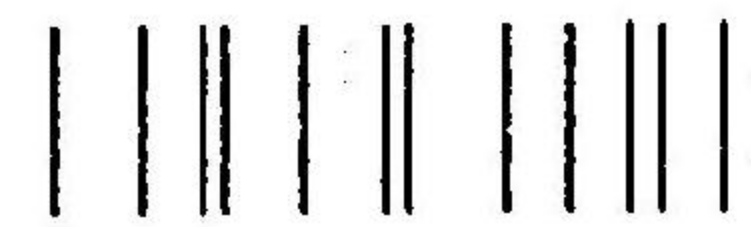
9-283

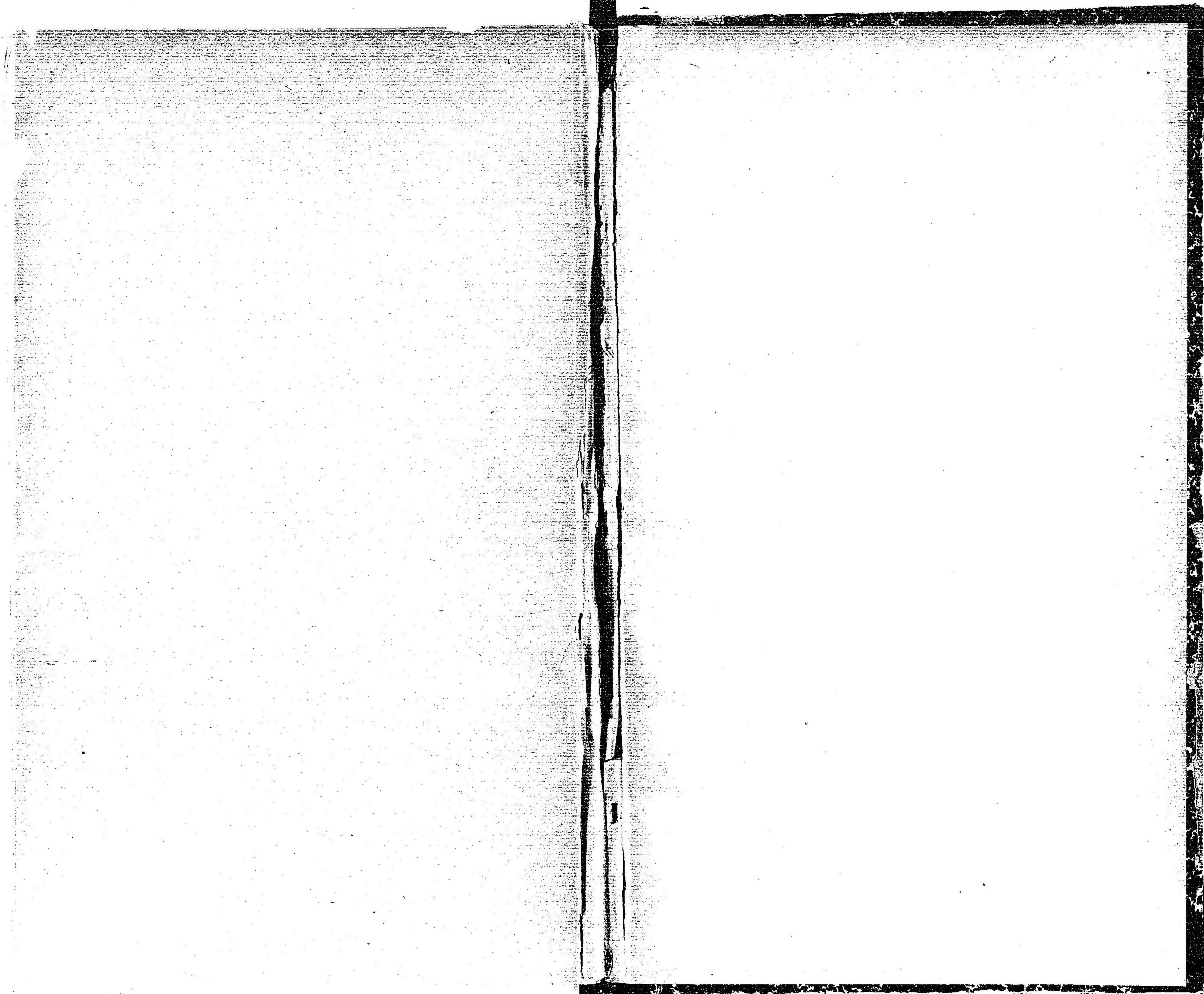
養蜂實驗問答

山口 富造/著

M27.5

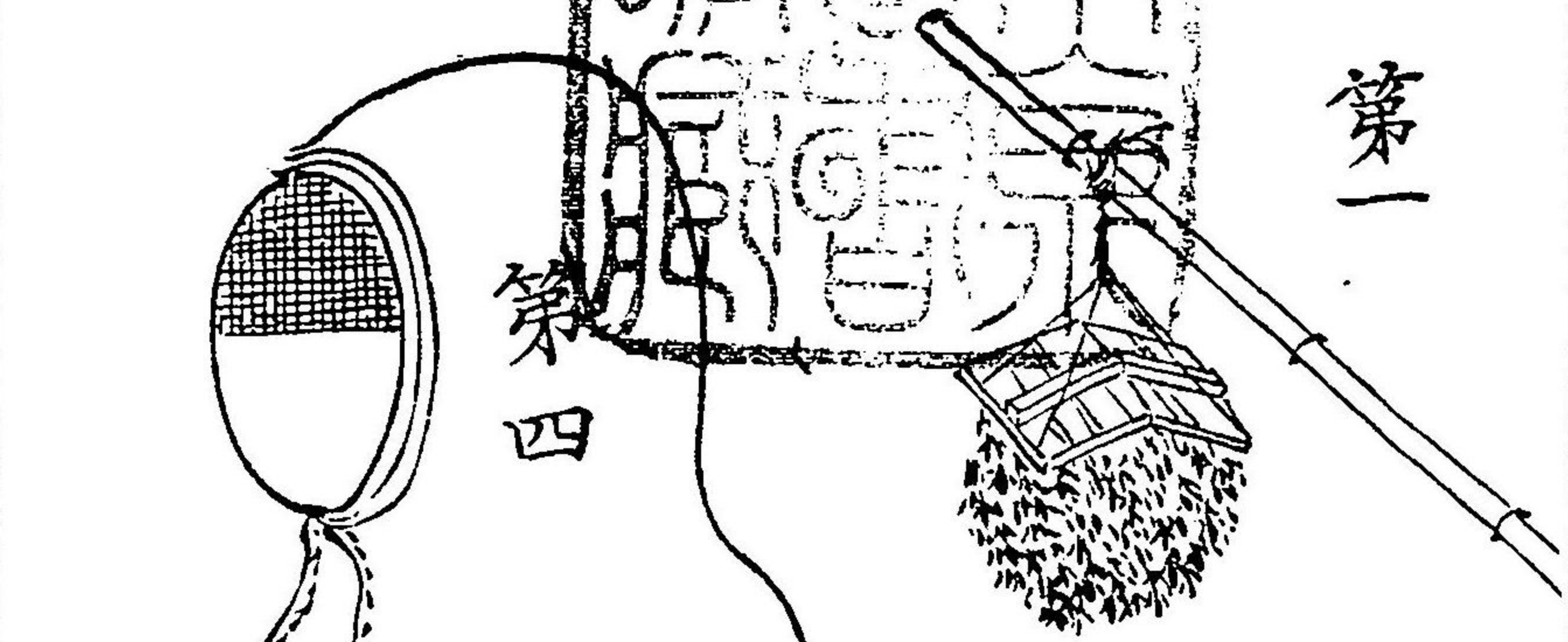
CCD-0648





養蜂圖

第一

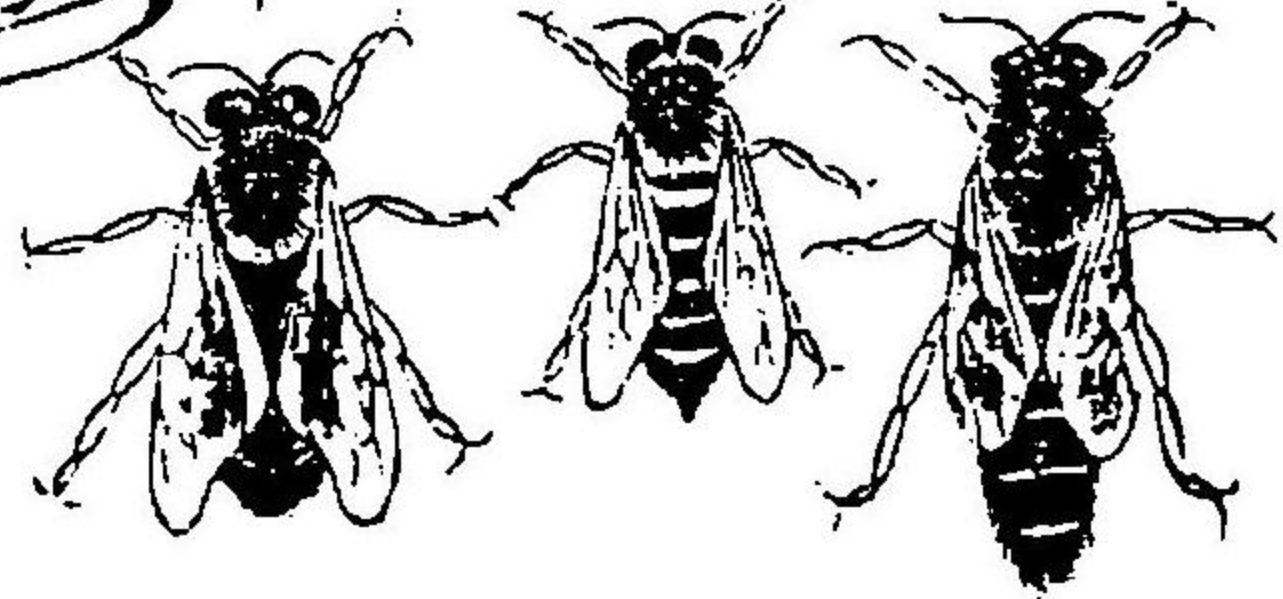


第四

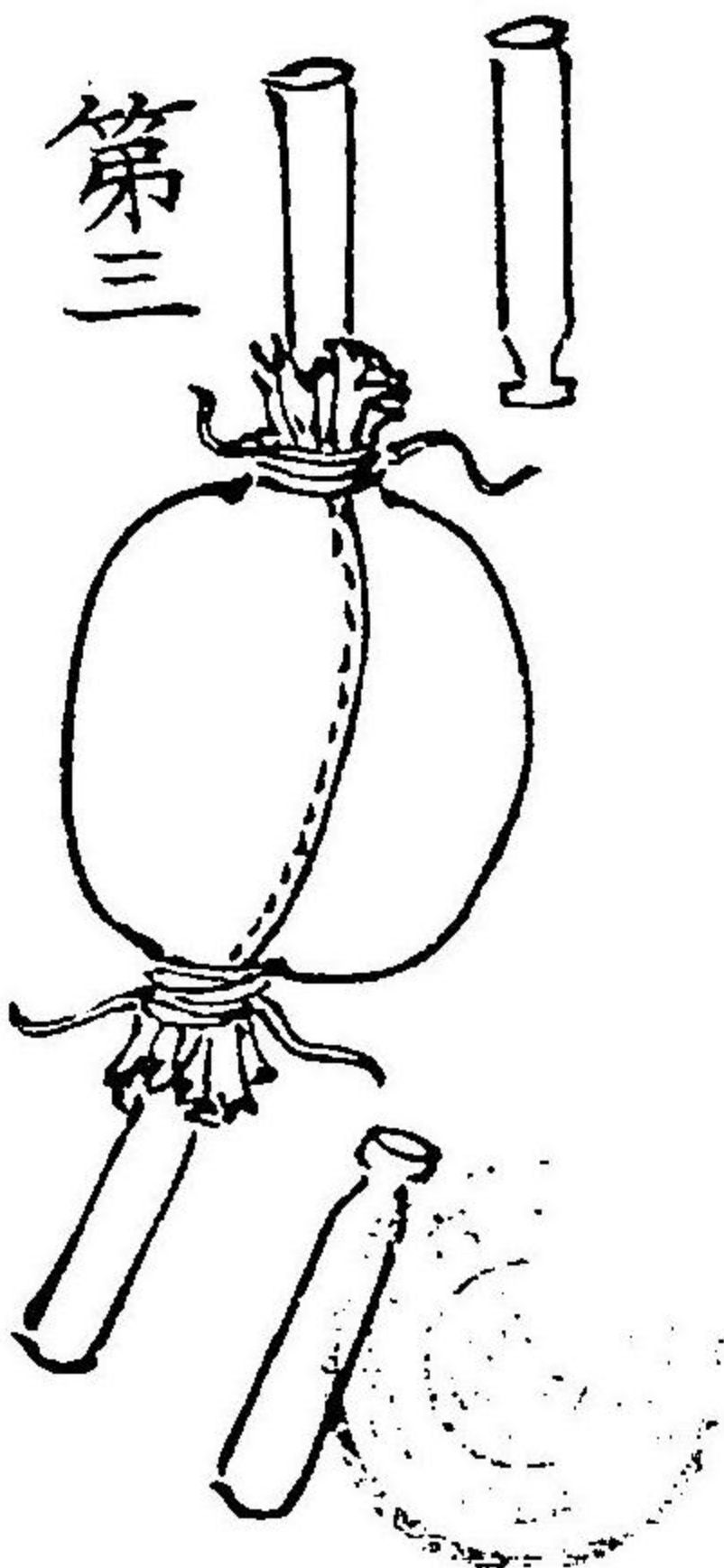
三
蜂雄

二
蜂働

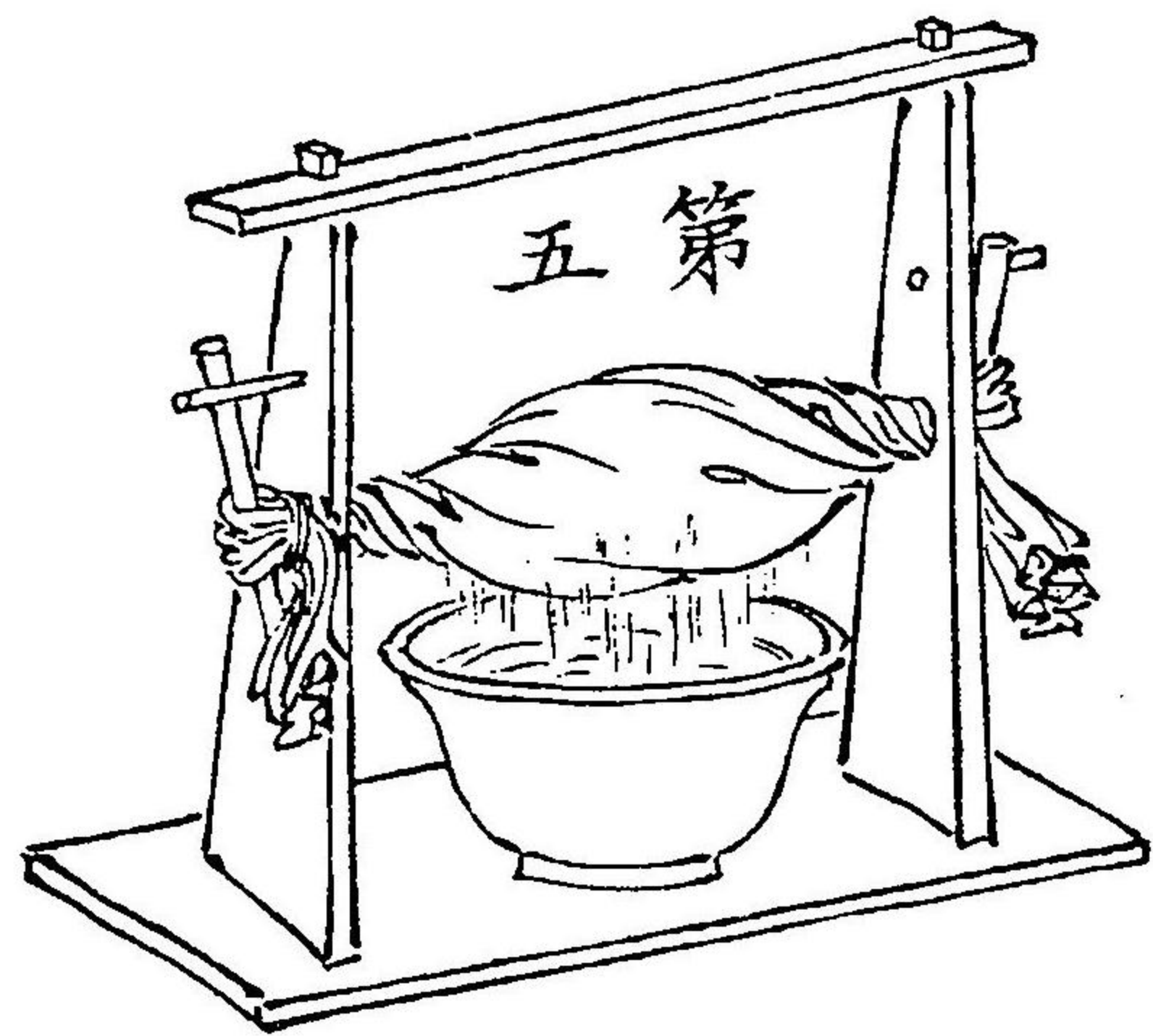
一
王蜂



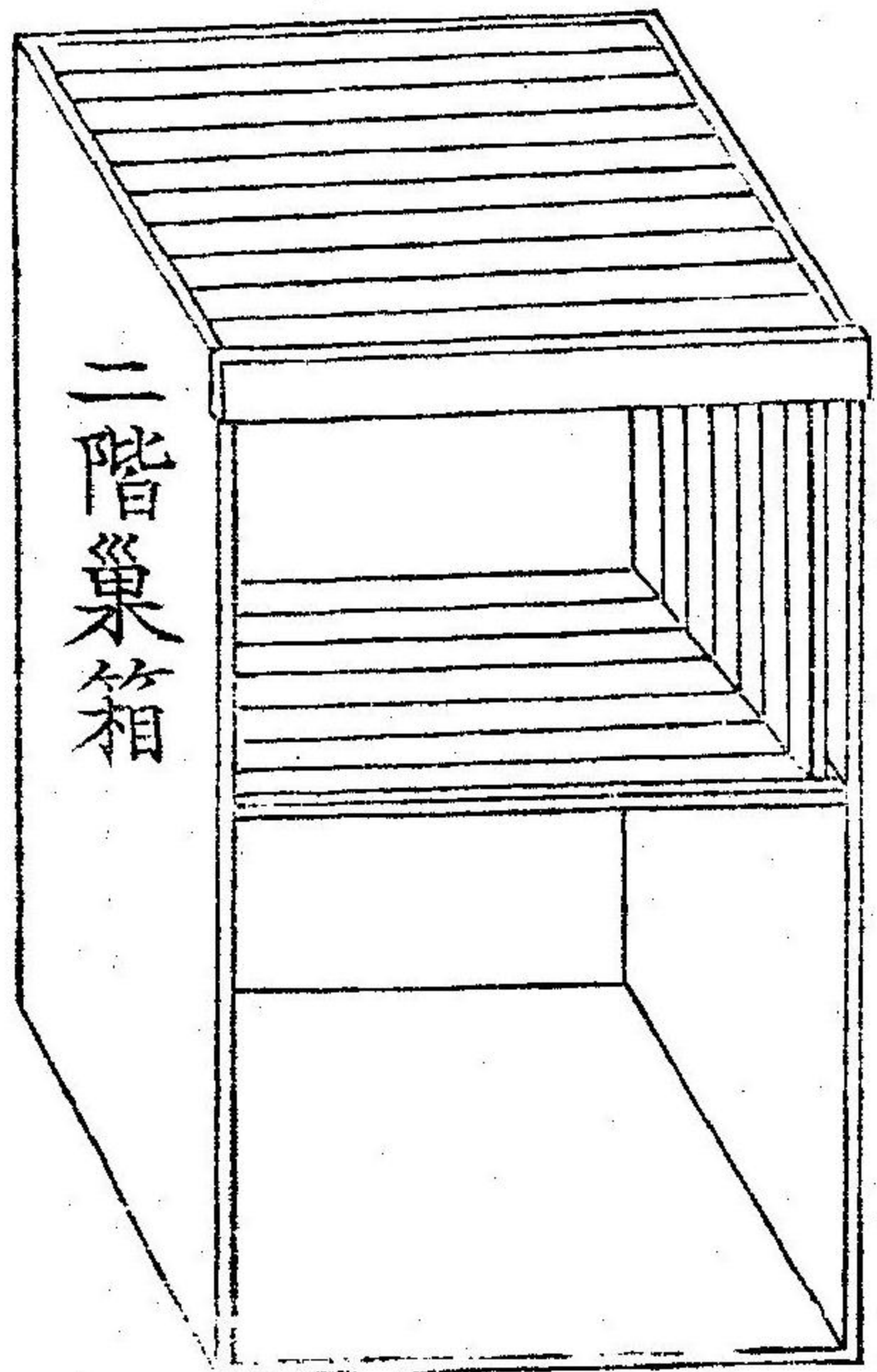
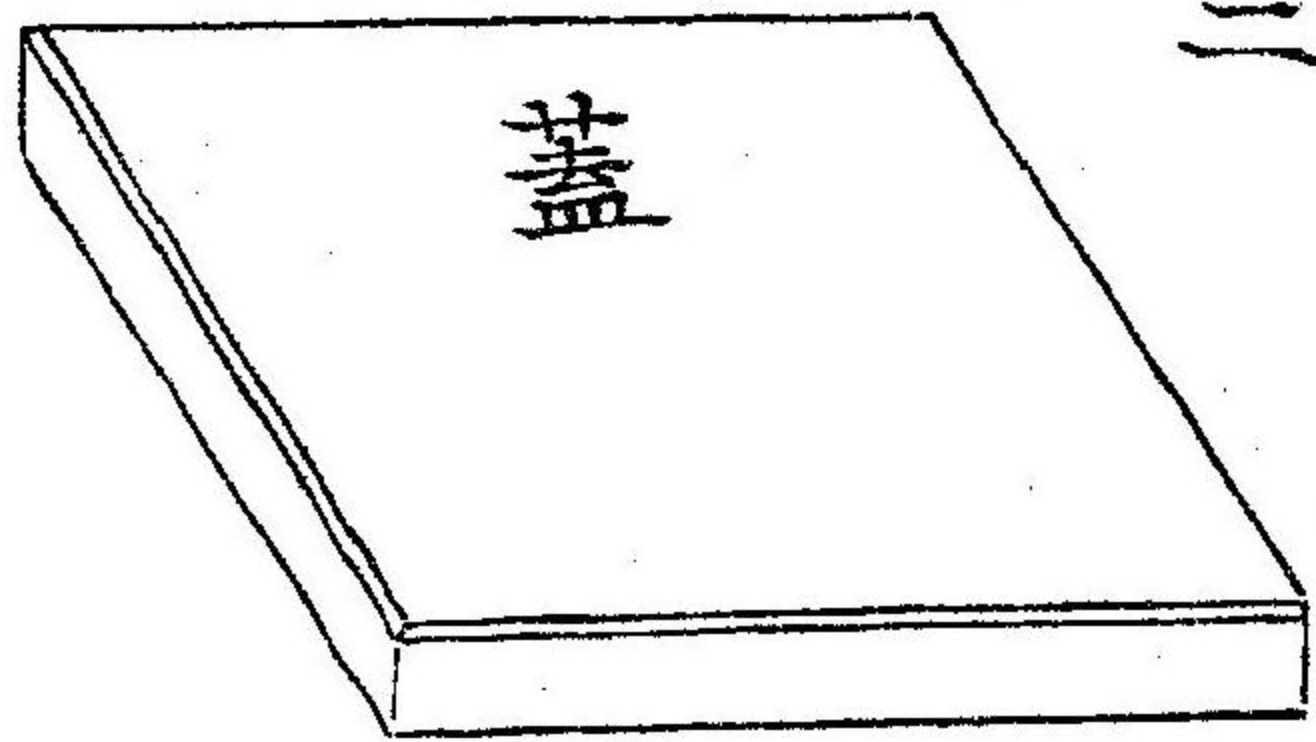
第三



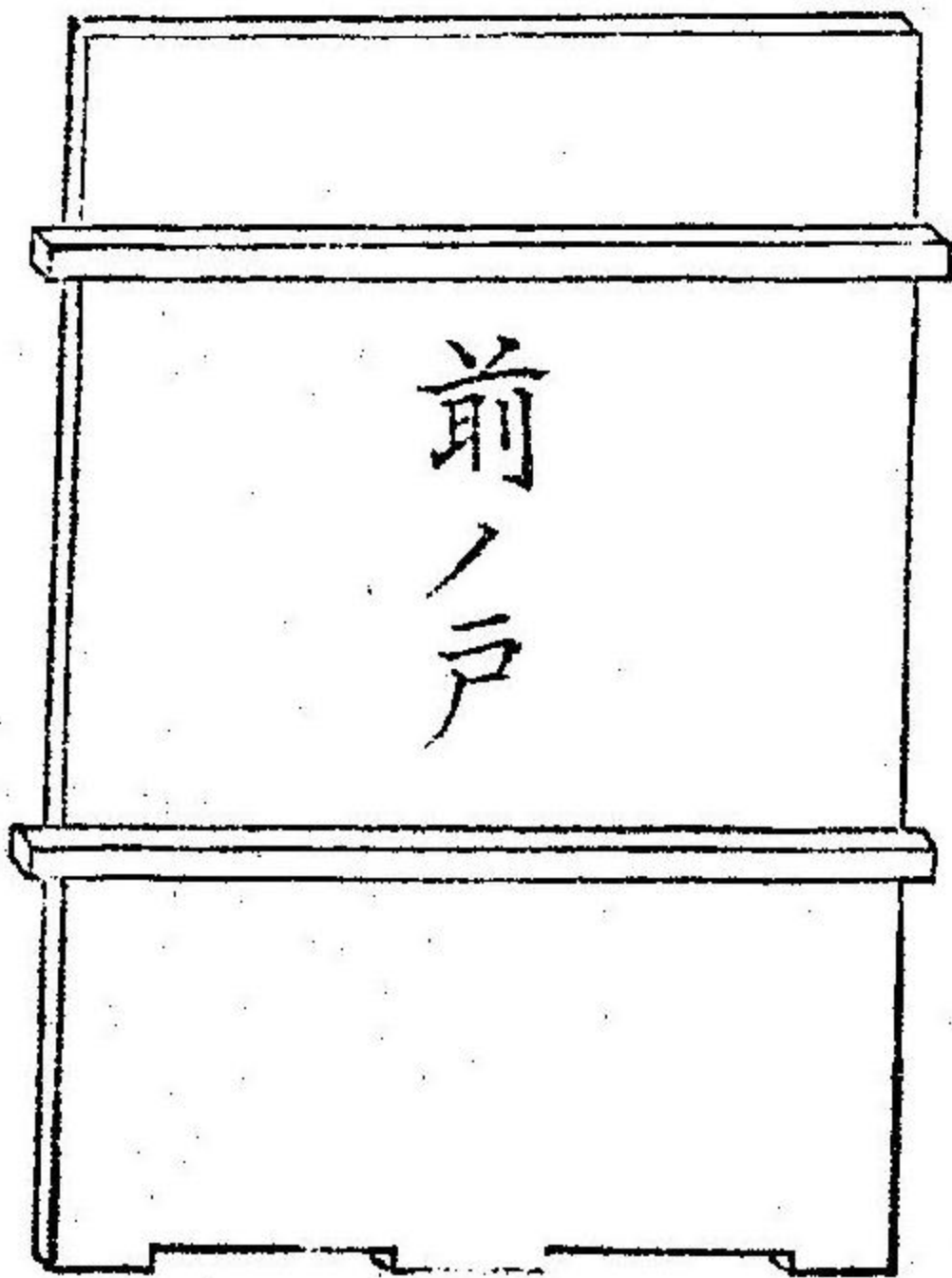
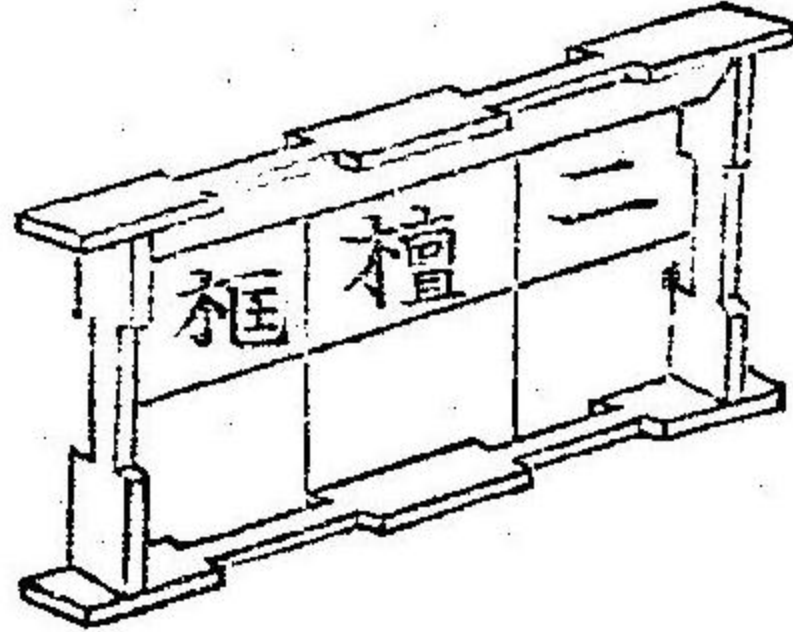
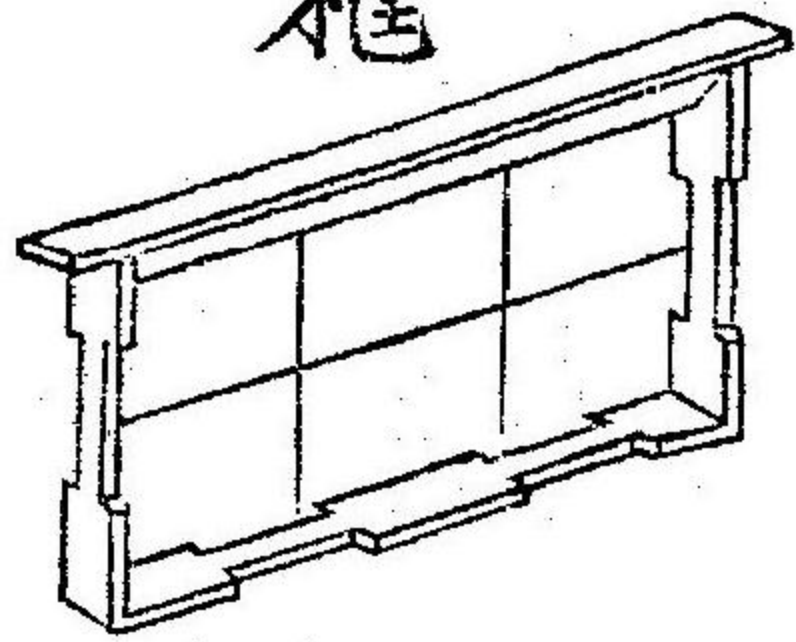
第五



第二



第二
上櫃



序

蜂をかふには蜂の心をまらすはあるへからすはちの心をまらすしてみたりにかへはさわきたち飛ちり
 れどろへほろふるにいたるなりその心をしりてよく養へはさわかすちらすまはり數そひ巢わかれし
 れのくさかぬまざるなりひかし蜂飼の大臣と聞ゆる京極太政大臣宗輔公ははちをいくらどもなく
 かひたまひてなにするかまると名をつけて何磨それかしといはるればそのまゝにふるまひ出仕の時車
 のうらうへの物見にはくめくをどまれのたまへはとまりぬとなんは五月の頃鳥羽殿にて蜂の
 巢にはかにれちて御前におほく飛散たりければ人々さうれしとて逃騒さけるに相國御前に枇杷のわり
 けるを一ふさどりて琴爪にてこれをむきてさしわけられたりければ蜂のあるかさりとつきて散らさ
 りけるを附ながら御供の人をめしてやはらたひてけりとも見えてふしきの徳おはしけりとはめたへ
 しももはら蜂の心をまら給へはなりけんかしてまか蜂の心をまらんとはいとかたきわさにて一朝
 一夕にまらるへさきものならずかならず數十年かひならしてよく心をつくして實驗せすはあるへか
 らす然るをまかよく實驗せし人のくはしく記せる書をし見ればささにかたしとせしわさも一朝一
 夕にしてたやすくまらるめりわに實驗者の功大ならずやこゝに山口富造ぬしはすなはち其人とこそれ
 はゆれこの頃養蜂實驗問答をあらはされたり此書をし見ればいまた此わさにたつさはらぬものたにそ
 の心をしる心ちすましてはやくよりかへる人たちのためにはこよなきたまものなるへし何かしか飼蜂
 のあれたちて黒煙の如くさしもゆしくむらかれる中にたちてしつかに巢箱をとりあつかひ巢をつり

をへてことなくまつめられたるなどはいと優にをしくしてかの大臣の風流にもをさくれたるましくこそかゝるめてたき書し出来ぬれば今より後いよますく此わさ其盛になりもてゆきて我が國の物産の繁殖期して待へくいとれむかしくいとたのもしくなんはし書をどこはるまゝに一言しるせるは明治廿六年三月第四高等中學校篤志國語教員

高橋富兄

緒言

石川縣金澤養蜂有志家數十名郡ノ人集會シテ山口富造ニ養蜂集談會ノ會頭ヲ望ム富造辭シテ曰ク曩ニ農業講習所等ノ教員タリシトキハ不肖ナカラ其席ニ就キシモ今ハ思ヒモ寄ラスト再三辭ス有曰クイヤトヨ我縣下殊ニ金澤地方ニテ二十餘年來永續シテ養蜂一日モ欠カサル者君ヲ除キテ外ニ無シ退々縣下ニ養蜂ヲ盛ニセハ物産ノ一助トモ成ラント日ニ月ニ懇望スル所ナリ近來東京ヨリ農林學校養蜂改良説ヲ求メ來リ集會シテ讀ムニ分明ナル説モ有ト雖モ中ニハ高尚ニ過テ辨明成シ難キモアリ改良説ノ可否ハ如何富造答フ改良説ハ農學士玉利喜造先生ノ著シ給ヒタル書籍ニシテ氏ハ内國養蜂家ニ於テ神トモ云ツヘキ人ナリ如何トナレハ我國ノ養蜂家未熟ニシテ西洋各國ニ競テハ其差異素ヨリ論ヲ俟タストテ先年米國等ニ渡港シ養蜂ノ大家ニ就テ其實際ヲ經驗シ歸國ノ上ハ我國ノ養蜂家ニ傳テ實益ヲ計リ國家ヲ富源成ラシメントノ大志ヨリシテ遙々ノ波濤ヲ凌カレシ人ナリ其心勞其費實ニ察スヘシキハ該書ヲ讀テ闇夜ニ燈火渡リニ舟ヲ得タル心地セリ有曰ク然ハ我輩ノ養蜂未タ日淺キ故ト思考ス願ハ君ノ數十年來ノ實際經驗ト改良説ト我々ノ思考スル處ト合テ論判シ養蜂セハ實益多カルヘシ今ヨリ折々集會問答スヘシ必臨席ヲ希フトテ夫ヨリ所々ニテ會台ス筆記左ノ如シ世ノ同業諸君若シ十二一ツモ摘用スルコアラハ幸甚

金澤市師範學校舊教員

明治二十六年二月

山口富造

目次

第一章	蜂ノ原種ヲ問	同答	附越前鱒江ノ蜂ノ事
第二章	蜂ノ分封ヲ移シテ日ナラス又外へ移セハ逝去ルヲ問	同答	
第三章	分封ヲ移スニ西洋法ト内國法ノ可否ヲ問	同答	
第四章	巢箱ニ桶ト箱ノ可否ヲ問	同答	
第五章	固定巢箱ノ寸法ノ可否ヲ問	同答	
第六章	改良巢箱ノ可否ヲ問	同答	
第七章	同第二	同答	
第八章	同第三	同答	
第九章	改良巢箱ニ何ソ益有リヤ	同答	
第十章	油虫ノ害ハ何トスヘキヤ	同答	
第十一章	改良ニ王蜂ヲ殺シテ働蜂卵ヲ育テ王蜂ノ代嗣ニスト有ル其實否ヲ問	同答	
第十二章	改良說ニテ繪圖等ヲ見タルヤ	同答	
第十三章	河波先生ノ巢箱ノ可否ヲ問	同答	
第十四章	河内山氏ノ巢箱ノ可否ヲ問	同答	
第十五章	第二	同答	

第十六章	第三	同答
第十七章	蜂ノ分封ニハ王蜂一羽宛出ルカ	同答
第十八章	蜂分封大ナルモノハ王蜂二三羽モ出ルカ	同答
第十九章	分封ニ蜂ノ至テ少キモノハ用ニ立タサルカ	同答
第二十章	織田氏ノ巢箱置所可否ヲ問	同答
第二十一章	改良巢箱ニ巢礎ヲ用フ可否ヲ問	同答
第二十二章	蜜蜂ノ飼養第一ノ混雜ナルハ逃去ルノ一條ナリ是ヲ防ク術有リヤ	同答
第二十三章	蜂ノ巢ヲ合併スル法ヲ問	同答
第二十四章	日中ニ蜂ノ巢ヲ合併スル法ヲ問	同答
第二十五章	蜂ノ好ム植物論ヲ問	同答
第二十六章	極製ノ蜜ヲ製スル法ヲ問	同答
第二十七章	蠟ヲ製スル法ヲ問	同答
第二十八章	改良ニ甲箱ヨリ乙箱へ働蜂ヲ移スト有ル實否ヲ問	同答
第二十九章	同 甲箱ノ蜂ヲ乙箱へ振落スト有實否ヲ問	同答
第三十章	覆面ノ可否ヲ問	同答
第三十一章	簡易ニシテ上等蜜ヲ取ル法ヲ問	同答

第卅二章	同精製スル法ヲ問	同答
第卅三章	採蜜製蠟スルキ蜂ノ室内ニ入ルヲ止ル法ヲ問	同答
第卅四章	蜂ノ孫巢ノ事ヲ問	同答
第卅五章	前年紀効ヨリ來リシ蜂ノ一ヲ問	同答
第卅六章	至テ銳キ蜂ヲ穩ニシテ飼法ヲ問	同答
第卅七章	巢箱ヨリ逃去リタル蜂ハ來ルヲ無キヤト問	同答
第卅八章	巢箱ヨリ採蜜スルニ箱ヲ逆様シテ取法ヲ問	同答
第卅九章	切採タル巢ニ兒蜂多ク有キハ如何スヘキヤ	同答
第四十章	巢箱冬ノ保護法ヲ問	同答

養蜂實驗問答

第一章

石川縣農業講習所畜養員

山口富造 著

○養蜂有志問 蜂ノ原種ハ内國何レノ地ニモ山野等ニ有リヤ

富造答 我金澤地方ニ蜜蜂ヲ飼育スルハ何レノ地ヨリ始リシヤ其根源ヲ知ルニ由ナシ併天保十年頃本

多町某ノ庭前樹木ニ自然ト來テ蠢團スルヲ探テ巢箱ニ移シ飼育ス其蜂ノ子々孫々今ニ傳フ是ノ體ニ

目擊スル處ナリ又曰ク信務等ノ寒地ニテモ有ルト改ニ見ヘタレハ其余ノ暖地ニハ有ルナルヘシ明治

十一年金澤農業講習所生徒奥村義雄ハ越前鯖江ノ人ナリ舊藩中屈指ノ家柄ニテアリシ氏ハ入校シテヨ

能ク勉強シ就中校内飼育ノ蜜蜂ニ熱心ス然ルニ五月八十八夜過用事有テ歸宅ヲ出願ス富造曰ク本日

蜂ノ巢箱ヲ檢査スルニ數個ノ王臺蓋ヲナシタリ程無ク分封ス故ニ四五日ニテ歸校シタマヘ今分封ノ際

不在ニテ是ヲ見ラレスハ又明年ノ此頃ニアラサレハ見ルヲ能スト云氏承知シテ歸宅ス借久々ノ事故

友人等多ク來テ双方離別以來ノ物語杯シ適々ノ事ナレハ今度ハ緩々休暇有ルナルヘシト云氏曰ク久

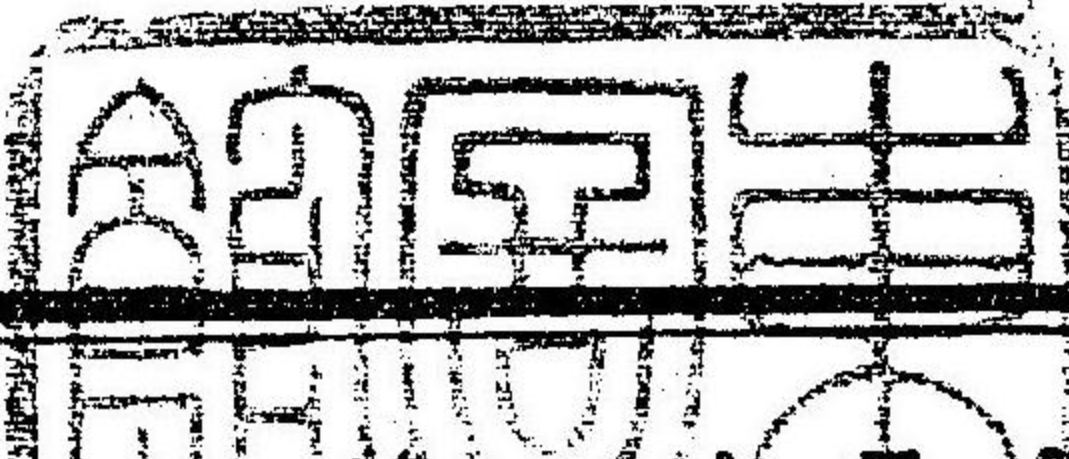
々ニテノ歸宅ナレ即今蜜蜂ノ分封ノ事ナレハ僅四五日休テ歸校セント云友人是ヲ聞テ曰ク蜜蜂ノ分

封トハ如何氏曰ク此邊ニハ未ダ無キ事ナレハ蜜蜂ト云一種ノ蜂有リ現在校内ニ數箱飼育シテ年々採蜜

黄蠟ヲ收ム然ルニ分封トハ蜂一箱ノ中ヨリ此頃ニ至レハ蜂嵩多キモノハ一蠢團ニ二升余或ハ一升又ハ

五合ト恰モ人ノ分家スルト同シ大概一箱ヨリ三四團出ルナリ又山口教員ハ七團出タルヲ最上トスト云

楮樹木ニ蠢團スルヲ厚紙袋ニ汲ミ取テ巢箱ニ移ス箱ハ新シキ板ヲ嫌ヒ雨露ニ晒シタル板ヲ良シトス故



ニ前年ノ冬製造シ雪中ニ晒ヌチ長シトス抔ト嘶ノ中友人某曰ク本日町端ノ椋ノ木ノ屈曲シタル所へ蜂ノ蠢團シタル有リ近隣ノ子供等はヲ見出し竹ヲ以テ突落シタルニ二三人螫レタルハ悪キ事ナリ燒キ殺スヘシトテ松明ヲ以テ燒ントセシニ崩レ立テ又二三人螫ス所ヲ見タル故惡虫ニ手ヲ出シテ螫レテ何ノ益カアラン捨置ヘシト頻ニ子供ヲ制シテ連レ歸リタリ若シヤ蜜蜂ニテハ在ルマシヤト云座中一統半信半疑何分往テ見ルヘシトテ提灯ヲ照シテ奥村氏ト外五六名走り行併シ未タ其儘居レハ宜シ先ハ逝去ルモ計リ難シト云テ行ニ程無ク先刻ノ所ニ至リ見ルニ猶蠢團スル故提灯ニテ能ク是ヲ見ルニ疑モ無キ

●蜜蜂ナレハ何レモ喜ヒ其儘ニシテ歸リ借箱ハ如何スヘキヤト云ニ俄ニ宜キ板モ無シ段々思考スルコト同氏ノ隣家地堺ノ板塀ハ杉ノ六分板ニテ雨露ニモ晒シタルモノニテ最上ノ板ナリ併我物トハ云ヒ乍ラ夜中ト云ヒ致方無シ夜明レハ蜂退散スルモ計難シト云フ友人曰ク隣家ノ亭主ハ正直ナル人柄殊ニ予ハ格別懇意ナレハ直ニ往テ説諭セハ異存ハ云フマシトテ往テ嘶スルニハ夜中ト云ヒ殊ニ地堺ノ板塀ヲ破リ取ルハ憚リ多キ事乍ラ實ハ蜜蜂一件明朝迄待レサル次第ハケ様々ト語ルニ隣家ノ亭主ハ珍ラシキ事哉殊ニ此方ヨリ修理スル所ニモ有ラサレハ早速御勝手ニ成シタマヘ予モ不肖乍ラ御手傳スヘシトテ快クモ道具箱ヲ携來リ手傳致シ吳レタリ程無ク箱出來シ友人モ皆宅々へ歸ルナリ斯テ明朝五六名往テ巢箱ニ移シ持歸リ庭前ニ据置飼育スルニ次第ニ盛ニナリタリト後ニ追々留守ヨリ報知スト云斯ク巢箱ニ移シ持歸リシ日又々友人多ク來テ云フ様昨日ハ惡虫燒殺セト云フニ今日ハ我地方物産繁殖ノ種トナルトハ實ニ農學ノ甲斐有ル一此一條ニテモ末頼母シ祝ヒ給ヘト云氏モ尤祝フトテ大酒盛チナシタリ

ト云

又曰金澤ニテモ蜜蜂ハ追々飼養者多ナルニ隨ヒ度々之ヲ見ル先年金澤市出羽町四番丁匹田氏ヨリ紙面ヲ以テ甚御難題乍ラ蜜蜂ノ義ニ付至急御來車ヲ乞ト云外ニ使ノ口上モ有ナリ予問テ曰ク蜂箱ハ有リヤ使曰ク無シト云然ラハ之ヲ持歸ルヘシトテ巢箱ト蜂蜜一瓶ヲ渡シ追付泰ルヘシトテ跡ヲ追テ走リ行使ト共ニ門ニ入ル同氏迎ニ出テ速ナル御來車ト殊ニ喜ヒ借云フ様本日午後一時頃庭内ノ柿木ニ蜜蜂來テ蠢團ス故ニ布袋ヲ以テ汲ミ取リ在合ノ古離箱ニ移スト雖モ蓋ノ透ヨリ出ルモ有リ又取殘リタル蜂ヲ追々汲取ト雖モ前ノ箱ヘ一集ニ移ストモナシ難ク先ニ箱ヲ置タル室内へ放チタルハ障子等ニ一合ニ合宛數ヶ所ニ蠢團シ居ルナリ友人モ五六名來リ手傳シタルニ螫レタルモ有リ今更放シ捨ルモ惜キト如何シテ宜ヤト云富造曰先其有様ヲ見ルヘシトテ庭内ヨリ室内ヲ見ルニ嘶ノ通りニテ柿ノ木ニ未タ蜂三合斗殘ルモ有リ借是ヨリ持參ノ巢箱へ移スヘシトテ箱内へ蜜ヲ塗り離箱ニ移シ有リタル蜂ヲ靜ニ移シ障子等ニ蠢團シタルモ取テ移スト雖モ全ハ移シ難クハ其儘ニ置キ箱ノ入口ヲ厚紙ニテ張り夫ヨリ庭内ノ柿木ノ初メ蠢團シタル所へ巢箱ヲ持行キ假ニ臺ニ据置蜂ノ動靜ヲ見ルニ儘ニ王蜂ノ巢箱内ニ有ル兆候判明ナレハ巢箱ノ入口ノ厚紙ヲ取捨ルニ柿木ニ殘リタル蜂ハ騒出シテ退々箱ニ入ルナレハ此時最早黄昏ニ近シ未タ室内爰彼所ニ殘ル蜂多クハ急キ火鉢ニ蓬チ薰ラスレハ煙ニ追レテ蜂ハ一羽モ殘ラス庭前ニ出テ暫時ニシテ全ク巢箱内ニ入り靜リタレハ夫ヨリ宜置所ニ据ルナリ氏殊ニ喜悅ス目撃シタル七八名ノ友人等モ誠ニ奇トモ妙トモ感スヘキノ至リナリト云

第二章

○問曰 蜂ノ分封ヲ移シテ日ナラス又外へ移スルハ多分逃去ルナリ如何シテ良キヤ
答 蜂ノ分封ヲ移スルハ前以テ其宜シキ所ヲ計ルヘシ前ニ述タル如ク夏日日光ノ直曝ト冬ニ至レハ雪
吹ノ烈シキ處ヲ嫌フヲ察シテ据置ヘシ前年金澤市三社町玉越氏分封ノ蜂ヲ巢箱ニ入レ庭前ニ据置キ
巢箱ニ屋根無キ故假ニ大ナル檜木笠ヲ屋根トナシ四五日過テ新シキ屋根ヲ製リ右ノ大笠ヲ取テ屋根ヲ
被セシニ蜂ハ俄ニ騒キ出シテ午後ヨリ夜ニ入ルモ巢箱鳴リ渡リテ止マヌ翌早朝ヨリ騒クコト同シ漸十二
時ニ至テ騒キ止ミタリ如何ナルヘキ哉ト報知ス乃往テ見ルニ是全ク巢箱ノ屋根ヲ取換タルヨリ怒リタ
ルモノニテ王蜂ヲ整殺セシモノト推察ス日ナラス働蜂ハ兒蜂ヲ産ムナルヘシ雌蜂ノ産ムモノト變リ巢
ノ一ツ穴へ五ツ十又ハ十五廿モ産ムモノニテ後ニハ蓋ヲスルニ至レハ一ツ宛殘シ蓋ヲシ育ルモ雄蜂ノ
ミニテ働蜂ハ一ツモ有ルコト無シ終ニハ全ク消滅スルモノニテ是ヲ病巢ト云惜シキ事ナレバ致方無シト
云果シテ殘ラス消滅スナリ其外所々ニテ如此ナルヲ見ル察スルニ蜂ハ新巢ヲ移シテヨリ毎日働ニ出テ
巢箱ニ歸リ來ルル遠方ヨリ先ツ高キ樹木或ハ高樓杯ヲ目的トシ來テ巢箱ノ屋根等ヲ見込テ來ルモノ成
ルニ斯ク俄ニ目的變動シテハ怪シキヲ限リ無ク怒ルコト尤ナリ故ニ分封ヲ移シテ二十日三十日ヲ經過ス
レハ兒蜂ヲ産ミ巢ニ蓋ヲナスニ至レハ夫ヨリ外々へ置所ヲ換ヘ或ハ屋根ヲ取替テモ指支無シ又數里ヲ
隔テタル所へ送りタルモノハ却テ指支無キモノナリ

第三章

○養蜂有志問テ曰ク蜂ノ分封ニ際シ改良說ニハ蜂ノ樹木ニ蠢團スルヲ待テ竹ニ移シ夫レヨリ巢箱ニ移
スト有ル我地方ノモノト可否如何
答 我ニ開ケテ彼レニ未ダ開ケサルコト万ニ一モ有ルマシト申難シ我地方ニテモ二十余年前 予ノ養蜂ヲ
始シ頃ニハ樹木ニ蠢團スルヲ待テ厚紙ノ袋ノ口ニ竹ノ輪ヲ入レタル直徑一尺三寸深サ二尺斗ノモノヲ
持高キ所ナレハ階子ニ登リ是ニテ蠢團ヲ汲ミ取リ巢箱へ移スナリ併其際袋内ニテ蜂少々死ルコト有リ右
ハ空氣ノ緩ケサル故トテ其後ハ布袋ヲ用ルコトモ有リ其後ハ今ノ改良說ノ如キ竹ニテ汲取ナリ明治十四
五年頃友人ノ發明ニテ今ノ(第一圖ヲ見ルヘシ)「ラッパ」ヲ用ルコト始ルナリ其形チハ杉ノ四分板ニテ
棟折シタル屋根ノミノ形チヲ九寸四方ニ造リ裏ヨリ杉ノ皮ヲ打付ヘシ表ノ四隅ヨリ麻繩ヲ附上ニテ一
集ニ結ヒ止メ二三間ノ竿ノ上ヨリ一尺斗下ニテ結付ヘシ右蜂ノ巢一箱ニ三四個ヲ備ヘ置キ分封近寄ラ
ハ先巢箱ノ近傍ノ樹木ニ建置ヘシ十ノ八九ハ是ニ蠢團スルナリ蜂ノ體ニ靜ルヲ待テ竿ヲ靜ニ傾ケ繩ヲ
解キ靜ニ箱へ入レ戸ヲ立ルナリ尤箱ノ内天井ト後ノ方へ蜂蜜ヲ塗ルヲ定法トス我改良巢箱ニハ框ニ蜜
ヲ塗ナリ三階ノ箱ナレハ始メ上櫃ヨリ巢ヲ造ラシムル故上櫃ノ框ニ蜜ヲ塗リ中下ノ框ハ外シ置キ後ニ
中下ト順ニ巢ヲ造ラスルナリ右竿ニ結ヒ附タル「ラッパ」ヲ木ニ寄セ掛ルニ心得有リ風ニ動キテハ蠢團
セス故ニ木ノ枝幹ニ儘ニ押付テ動かサル様ニスヘシ一度ヨリ二度三度ト蠢團シタルモノニハ彌ヨ付キ
易クハ養蜂家ニテハ貴重ナル物トス其初メ如何ナル所ヨリ發明シタルト云フニ庭内ノ菓樹ノ枝ニ接
木ス所謂呼ヒ接ノ砧木ヲ菰藁等ニ包ミタルモノ其裏面ニ分封ノ蜂屢蠢團ス故ニ「ラッパ」ヲ造リ試験ス

ルニ果シテ功有リ西洋ニハ未タ無キヤ此物ハ極輕便ニシテ其際蜂ノ少シモ損スル患無シ然ニ汲取テハ
貴重ナル蜂王ヲ痛ルコト有リ亦十ノ八九ハ汲取移スト雖モ樹ニ少々残りタル中ニ蜂王殘ルコト有レハ暫時
ニシテ箱ニ入レタル蜂崩レテ再度本ノ樹木ニ蠢團ス又汲取テ移スナリ而スレハ手数多キコト勿論ナリ斯
ク諸方ノ樹ニ「ラップ」ヲ配リ置モ思ノ外蠢團セスシテ群蜂次第ニ他ヘ行事有リ若シ左様ナルキハ手早
ク竿ニ附置タル「ラップ」ヲ其儘持テ群蜂ニ先達走リ行キ蜂ノ多ク集リタル木ノ枝ヘ指出セハ必蠢團ス
若シ手後レシテ樹ノ枝幹ニ蠢團スルモ泥ミ無ク其具中ヘ指出シ必ス動サル様スヘシ暫時ニシテ皆此方
ヘ移ルナリ

第四章

○有志問曰 内國ニテモ甲苜等ニテ巢箱ニ桶ヲ以テスト改良說ニモ見ヘタリ箱ト桶ノ得失如何
富造答 桶ハ不可ナリ先年農業講習所生徒内田尙事氏ヲ縣廳ノ命令ニテ和歌山縣紀務ヘ養蜂傳習ニ遣
サレ歸途ノ節種蜂十二桶携來ルコト此桶ヲ見テ不可ナリト云内田氏曰ク今一目スルヤ不可トハ如何乎曰
ク巢箱中輕キキハ障リ無キモ次第ニ繁殖セハ巢ノ重量ニテ桶ノ入口横長ク階圓ニナリテ蓋ノ扱ヒ困難
ナルヘシト云内田氏曰ク然リ直ニ其可否ヲ辨明ストハ多年ノ實際經驗恐レヘシ我モ素ヨリ不可トス故
ニ追々箱ニ移スヘシトテ二年斗ニテ全ク箱ニ移セシナリ

第五章

○有志問曰ク 固定巢箱ノ寸法何程ヲ良シトスルヤ

富造答 金澤ニテモ様々ナルヲ見ル味附倉丁榊原氏ニテ豎三尺横奥行トモ二尺斗ナルヲ見ル予モ十五
年前迄ハ豎横二尺奥行一尺五寸斗ナルヲ用ルナリ併箱大形ナレハ收蜜ハ多量ト雖モ新巢ヲ移シテ翌年
分封スルハ稀ナリ大概三年目ニ分封スルナレハ蜂ノ分封ヲ急ク地方ニテハ箱ノ少ナル方ハ分封早クシ
テ利益多シ予ノ近年用ル固定巢箱ハ内法リ高サ一尺四寸幅一尺一寸奥行一尺二寸ヲ用ヒ戸ハ前一枚ニ
シテ下ノ端ニ入口穴ハ高サ二分横二寸余ニケ所明ルナリ底板奥行一寸斗上ケ前ヘ傾ルハ巢ヨリ蒸發ス
ル水分ヲ滯リ無ク流ス爲メナリ木ハ杉ノ六分板ニテ箱ノ内底板ハ削リ其余ハ削ラサルヲ良トス

第六章

○有志問曰 改良巢箱ノ可否如何

富造答 予ノ改良巢箱ヲ用ルハ二三年前ヨリノ事ニシテ未タ數年ノ經驗ニ有ラサレトモ屢其益ヲ見ル
明治十四五年金澤農學校生徒津田正幸ニ命シテ勸農局ヨリ「伊太利亞」種ノ蜂ヲ一箱携ヘ來ラシムルニ
乃チ到着スト雖モ不幸ニシテ道中ニテ蜂多分斃レ僅ニ四五十羽ノ働蜂而已殘リ蜂王モ死シタルモノニ
テ程無ク皆死トナリタリ其蜂形ハ我地方ノモノトハ大形ニシテ少シ黃色有ナリ其巢箱ハ今ノ改良說ノ
巢箱ト違ヒ高サ三尺斗幅奥行トモ一尺四五寸内ニ三階ノ巢框ヲ用ル形ナレトモ先下櫃ニ巢ヲ造ラシメ
タリ右ノ巢箱ヲ摸造シタル物ニテ又是ト異ル所モ有ナリ杉六分板ニテ高サ二尺幅一尺一寸奥行一尺二
寸各内法ナリ蓋ハ箱膳ト同シ底板ト左右ト後ロハ釘打ニシテ前ノ戸ハ開閉固定巢箱ト同シ戸ヨリ上ニ
幅二寸ノ横棧有リ是釘モ打ナリ上櫃ノ巢脾框ハ蓋ヲ去リテ上ヨリ出入レス中櫃下櫃ハ前ノ戸ヲ開テ

出シ入レス併中檀下檀モ蜂盛ナリテ柁ヲ附着スルニ至レハ上檀ヨリ指引シテ其柁ハ上棧四方トモ棧幅一寸ニシテ上棧ノ裏ニ三角形ノ巢脾ヲ附着スル棧有リ如此ナルヲ奥ヨリ口へ何個ニテモ透間無ク入ルキハ少シモ間隙無レハ上棧ハ直ニ天井ト成テ尤蓋ト天井ノ間へハ蜂入ル事ナシ故ニ改良説ノ如キ桐油紙ハ無用ナリ柁ノ棧四方トモ出合ハ互ニ一分五厘ヲ透ス故へ合テ三分ノ透有レハ蜂ハ潜ル事自由自在ナリ中檀下檀トモ柁皆同シ柁ニ縦横圖ノ如キ鉄線ヲ張ルナリ斯クセサレハ採蜜ノキ巢脾ト柁ト離レテ落ルナリ(第二圖ヲ見ルヘシ)

第七章

○又問 巢柁ノ棧何ヲ以テ一寸ト定メタルヤ

答 古巢箱ノ巢ノ落タル跡ヲ曲尺ヲ以テ數度検査スルニ其大ナルモノハ一寸五厘小ナルモノハ九分五厘大概一寸ナルモノ多クレハ一寸ト定メタルニ適度ナルニヤ毎モ過不足無リシナリ柁ハ杉ノ四分板ヲ用ユ東京ノ三分板ト同シカルヘシ巢脾柁ノ高サハ六寸ト定ム三階ニテ一尺八寸ナリ二尺ノ内法ノ箱ニ入レテ下ニ二寸ノ塵落シ有リ又高サ一尺四寸ノ箱へ二階ノ(第二圖ヲ見ルヘシ)巢柁ヲ用ヒテ巢ヲ造ラシメタルモ有リ何レモ試験中故へ未タ何レヲ是トモ言ヒ難シ斯ク固定巢箱ノ如ク前ニ戸有ル故毎度開閉シテ内ノ動靜ヲ見ルモ横ヨリ透シ見レハ見易クシテ蓋ヲ拂フ如キ混雜無シ

第八章

○又問 何ニ因テ上檀ヨリ巢ヲ造始メタルヤ

答 蜂ノ性質トシテ巢箱ニ移サハ直ニ天井ヨリ巢ヲ造リ始ルハ元ヨリ蜂ノ好所ナレハ天然ニ背シハ不可ナレハ蜂ノ意ニ任スナリ上檀ニ滿ルヲ伺ヒ其前ノ方ヨリ三四枚ノ巢脾柁ノ上ノ方ニハ蜜ヲ貯ヘ下ノ方ニハ兒蜂ヲ産ミタル柁ヲ取テ中檀へ移セハ直ニ働蜂取巻テ飼育スルナリ上檀ノ柁ノ跡ハハ中檀ノ空柁ヲ入レ置ハ直ニ新巢ヲ造テ滿ルニ至レハ又取テ下檀ニ移ス前ノ如シ在來ノ固定巢箱ヨリ採蜜ノキ巢脾ヲ切取ルニ季節ニモ寄ルト雖モ大概巢ノ上ノ方ニ蜜ヲ貯ヘ下ノ方ニハ子ヲ産ハ彼ノ性質ナレハ斯ク巢箱ノ内柁ヲ三階ニシテ巢ヲ造ラシメハ上檀中檀ニハ多分蜜ヲ貯ヘ下檀ニハ多分兒蜂ヲ産ニ至ン然ラハ機械ニ掛テ收蜜スルニ便利ナルヘシト考へ備ヘタルニ隨分都合能ク見圖リ通りニ成ルナリ

第九章

○又問 改良巢箱ニ何ソ益有リヤ

答 大益アリ固定巢箱ニテ蜂ヲ飼フニ其盛ナルモ俄ニ巢中ニ蛆ヲ生シ其害タルヤ甚シキニ至テハ忽チ巢ヲ乘リ取ルヲ在リ蜂ハ巢ヲ取ラレテ傍ノ隅ニ集塊スルヲ誠ニ笑止千萬ナルモノ折々見ルヲ有リ斯クナルモノハ蜂王在レハ程無ク退散ス蜂王無キモノハ次等ニ困窮シテ皆死ト爲ルナリ素ヨリ飼養者ノ不注意ト雖モ如何トモ成スヘキ様無シ改良巢箱ニテモ油斷ハ成ラスト雖モ蜂ノ出入盛ノナラスシテ若シヤ蛆ニテモ生シ常ニ變リタル容子有ルキハ直ニ蓋ヲ除ク巢脾柁ヲ前ノ方ヨリ一枚宛取出シ裏表ヲ詳細ニ検査シテ少シニテモ蛆ノ兆候有ルモノハ其儘切捨毎日斯ク改メ若シ蜜ノ貯ヘ少クレハ直ニ補助スレハ程無ク元ノ如ク盛ニナルナリ之ニ反シテ固定巢箱ノ巢脾多蜂多キモノモ右ノ蛆害ヲ生スルキハ冷

氣ノ節ハ直ニ巢脾ノ蛆有ル處ヲ切取テ其害ヲ除クモ大暑ノ節巢ヲ切取ラハ果シテ蜂ハ怒テ退散スルニ決シタリ此一條ニテモ改良巢箱ヲ可トスルナリ

第十章

○又問 油蟲ノ害ハ何トスヘキヤ

答 蜂ノ巢箱ハ大概屋腰等ノ勝手廻リ近キ所ニ据置モノナレハ時トシテハ箱内ニ數十羽ノ油虫群リ來リ甚シキニ至リテハ蜂ノ兒ヲ捕テ逃去ルモノヲ見ルコト有リ彼ノ物ハ外ノ動物ト違ヒ蜂ノ整位ノ痛ミハ少モ苦ニセスト見ヘタリ其證據ハ彼レヲ打殺スル下モ半身打切ラレ上半身ノモノ腸ヲ引摺テ走り行其速キコト常ノ如シ殊ニ晝ハ箱外ニ潜ミ居テ夜ニ至レハ來テ花粉ノ落タルモノヲ喰ヒ蜜ヲ盜ミ喰ナリ蟻ノ害ハ巢箱ノ臺ノ足ヲ陶器ニ指シ入レ水ヲ絶ヘス入レ置ハ儘ニ防クト雖モ油虫ハ羽根アリテ防クニ困難ナリ然ルト雖モ先ニ述タル如ク改良巢箱ニテハ框チ一枚宛改テ箱外へ出シ油虫ト雖モ追詰テ一匹モ殘ラス打殺スニハ便利ニテ三四日續テ施セハ全ク取り盡スニ至ルナリ斯ク巢框チ一枚宛取出シ箱内ヲ改ル事ハ數万ノ蜂有ルヲ何トシテ爲スヘキ事トモ思ヒノ外毎度改レハ蜂ハ馴レテ騒ク事無ク靜ナルモノナリ

第十一章

○又問 改良說第二十二枚ニ働蜂ハ蜂王ヲ刺撃シテ屍ヲ巢外ニ捨テ働蜂卵ノ孵化シテ第三日目位ナル小蟲ヲ擁立シ其周圍ノ房ヲ破壞シテ茲ニ一ノ王臺ヲ築キ該小蟲ヲ養フニ王ノ祇物ヲ以テス然ルキハ定

期ニ至リ一個ノ新王嗣立シ該巢復繁昌スヘシト有、其實否如何

答 去年十月廿二日予庭前ノ三階ナル改良巢箱午後四時過俄ニ蜂騒出シ分封ノ時ノ如シ秋ノ土用中ナレハ最早冷氣ニテ逃去ル時ニモアラス時刻モ黄昏近ケレハ何トモ判談爲シ難シ併次第ニ羽音強クナル故出テ見ルニ容易カラサル騒動ニテ何トモスヘキ術無ク手ヲ空クシテ見テ居ル而已程無ク日ハ暮レタレトモ巢箱ノ音ハ鳴リ止マヌ察ルニ十日前途ハ折々赤蜂ノ來ルヲ打殺シタルニ其後ハ冷氣ニテ來ラサリシニ又今朝ヨリ少シ暖氣故ハ赤蜂ニツチ打殺シタルニ其間ニ蜂王ノ遊ヒニ出タルヲ赤蜂カ或ハ雀ニ取レタルナルヘシ惜ヒ哉此巢ハ是ニテ消滅スルハ必定哉ト歎息スレトモ致方無シ折惡敷翌廿三日ニハ早朝能美郡迄用事有テ發足ス其時右ノ巢箱ノ前ニ至リ見ルニ是所彼處ニ蜂ハ一合或ハ五夕三夕宛四五ヶ所ニ蠢團シ終夜箱内へ入ラスシテ夜ヲ明シタル者モ有ルカ是レ無論王蜂消滅ノ兆候ニテ前年モ所々ニテ見タル事有レハ嗚呼残念ト思ヒテ發足ス其夜ハ寺井村ニ一泊シ廿四日黄昏ニ歸宅スルモ大雨降リ殊ニ夜ニ成レハ蜂箱モ見ス廿五日ハ晴天ナレハ午前十一時頃巢箱ノ前ニ至リ見ルニ最早靜リテ常ノ如シ儲巢箱ノ前ノ戸ヲ取り夫レヨリ上ノ蓋ヲ去リ巢脾框ヲ前ヨリ一二ト順ニ取りテ裏表ヲ屹度改メ蜂王ノ有無ヲ檢査スレトモ奥ニ至ルモ王ノ不在ハ察シノ通りニテ見ルコト無シ漸ク一羽ノ雄蜂ヲ見タル而已ニテ其余ハ全ク働蜂ナリ儲元ノ如ク奥ヨリ第一二ト順ニ巢框ヲ納ルニ第二ヲ取テ納ントスルニ豈ニ計ンヤ巢脾ノ下端ニ二ツノ王臺ヲ見ル第三ニモ一ツ有リ都合三ツ有リ思ヒ掛無キ幸ナレハ其儘框ヲ箱外ニ取出シ能々之ヲ見ルニ先達テ騒動シタル日ヨリ第四日メニシテ王臺ノ中ニ早ヤ半分余ノ蜂兒ヲ見タ

レハ大ニ喜悅シテ静ニ巢櫃ヲ順ニ納メ置同廿八日巢箱ノ蓋ヲ去リ前ノ如ク巢脾ヲ改ルニ三ツ共ニ王臺ニ蓋ヲ成シタリ元ノ如ク納メ置キ同三十一日改ルニ未タ蓋ノ色モ變ラス十一月三日騒動シテヨリ第三日ニ當ル則改ルニ王臺ノ蓋ヲ破リテ出タル跡アリ其余ノ二ツハ横破リシテ中ニ何モ無シ是全ク不用ニ付働蜂ノ所爲カ或ハ先ニ出タル王蜂ノ所業ナルヘシ倍王蜂ハ有リヤト尋ルニ與ヨリ二枚目ノ巢櫃ニ立派ナル王蜂ヲ見タリ夫ヨリ後ハ働蜂彌ヨ能ク働クナリ是レ全ク改良巢箱ノ功ニ依テ判然タル検査ヲ得タルナリ

第十二章

○有志問曰 改良説ニテ初テ繪圖等ヲ見給ヒシヤ

答 然ラス明治十五六年東京ヨリ農業生徒教授ノ爲ニ彩色シタル掛圖數十枚ヲ取寄セタル中ニ養蜂圖解有リ今ノ圖ト似タルモ有リ粗大同小異ナリ

第十三章

○有志問曰 先年河波先生方ニテ固定巢箱ニ前後左右天井トモ穴ヲ數十個明ケタルヲ見ル其可否如何
答 河波有道先生ハ石川縣ニ於テ漢學理學農學屈指ノ大家ナリ併養蜂ハ予ヨリ數年後ニ始給テ農業講習所同勤タリシヤ同所ノ蜂箱ノ戸ニ玻璃板ヲ以テスヘシト云予肯不如何トナレハ俄ニ巢箱ノ中透明ナラハ様々害有ルヘシト云然ラハ自宅ノ物ニ試ムヘシトテ去リ給フ次ノ日先生ノ許ヘ訪テ玻璃戸ノ試験爲シ給ヒシヤト問ニ先生曰昨日爲シタリ見ラレヨト有ル乃チ是ヲ見ルニ巢箱ノ戸ニ堅横四五寸ヲ切抜

キ玻璃板ヲ入レ給フ蜂ハ俄ニ戸ノ内外ニ群集シテ内ヨリ出ル者ハ勿論外ヨリ歸リ來ル者モ巢ノ見ヘテ入ラレサルヲ怒リ飛付キ々々スル中次第ニ勞レテ斃レタルモノ戸ノ内外ニ夥シ先生是ヲ見テ大ニ困リ給フ連モ此儘ニテ置難シ元ノ通りノ蓋ニスヘシ夫レ迄何ト成スヘキヤト問給フ予曰然ラハ墨筆ヲ貸シ給ヘトテ玻璃板ノ所ヲ墨ニテ塗レハ蜂ハ其儘靜ニ成リタリ予曰ク先生試驗ニモ程力有ルナランカト云ヘハ先生笑給フ予モ共ニ笑テ去ル

第十四章

○又問 河内山氏ノ固定巢箱ハ前後ニ二枚宛ノ戸有リ出入ノ穴其戸ニ數十有リ下ニ深サ二寸斗ノ引出シ有リ可否如何

答 不可ナリ予同氏ニ往テ見ルニ下ノ引出シ毎モ少シ出シ有ルハ入口穴高キ處ニ數十個有ト雖モ下ニ穴無キ故ヘ蜂ハ巢箱内ノ塵或ハ蜂ノ死体等ヲ捨ルニ引出シノ椽迄持上リ外ヘ捨ルヲ見ル其困難見ルニ忍ヒス又引出シ出テ過レハ赤蜂這入テ難澁ナラシム

第十五章

○又問 然レトモ引出シヲ取扱テ掃除スルニ便理ナランカ

答 蜂少ナキハ板キ指モ成ルト雖モ蜂滿ルキニ差引セハ蜂多ク傷ル故成リ難シ

第十六章

○又問 分封ヲ移スルハ斯ク前後ニ戸有レハ蜂ノ巢脾ヲ附着シタル方ヲ與トシ

ノ無キ方ヲ前トセハ

一方口ノ箱トハ便理ナランカ

答 一方口ノ箱ニテ事足ルヘシ箱ノ製造ニモ手數違ヒ若シ一方口ノ箱ニ分封ヲ移シ戸ノ方ヘ巢ヲ造ントセハ其夜ノ中ニ蜂ノ蠢鬪ヲ手箒ニテ與ノ方ヘ靜ニ押シ遣レハ右ヘナリトモ左ヘナリトモ思ノ儘ニナルナリ數年經驗スル處ナレハ指支無シ又右ノ箱ハ前後ノ戸ト引出シニテ油虫ノ隠ル所多クシテ利益無シ戸ノ數ヶ所ノ穴モ蜂ハ晝夜立番ヲ置ニ甚困難スト見ヘテ次第ニ内ヨリ蠟ヲ以テ塗リ埋メタルヲ同氏方ニテモ河波氏方ニテモ見タルナリ故ニ何レモ近頃ハ戸ノ穴ハ止メラレタリ河内山氏ハ入口ヲ下ニ開キ給フ

第十七章

○有志問曰 蜂ノ分封ニハ王蜂一羽宛大將ノ有様ニテ衆蜂ヲ引卒シテ出ルモノカ

答 左レハトヨ西洋人モ未ダ一蠢鬪ニ王一羽宛出ルモノト見ルカ何レトモ明瞭ナル説ヲ聞カス予モ一羽宛出ルナルヘシト思ノ外ノ事有リ明治廿三年六月中頃金澤市柿木島長谷川氏ノ蜂分封ス蜂嵩ニ升余モ有リ氏ハ喜テ新巢箱ヘ移シ大群ナレハ別シテ大切ニ取扱ヒ熱心家ナレハ翌早朝起テ巢箱ノ前ニ至リ見ルニ計ラサリキ戸ノ入口ヨリ落ルモノ有リ手ニ取見ルニ王蜂ノ死躰ナリ是ハト驚ト雖モ今更スヘキ様無シ偕ハ昨日分封ノ「ラッパ」ヲ取テ移スル鹿粗ニモナリタルヤ貴重ナル王蜂ヲ斯ク死ニ至ラシメタルトハ返ス返スモ誤リタリト深ク愁歎ス此時養蜂友人長町四番丁織田氏ニ王蜂ノ不用ナルモノ有ト聞テ同氏ニ賞ヒ來テ群蜂ノ中ヘ移スニ苦モ無ク這入タリト云チハ此嚙ヲ聞翌早朝長谷川氏ヲ訪テ乃チ巢

箱ノ前ニ至レハ氏ハ巢箱ノ戸ヲ取テ見セ給フニ蜂騒キテ靜ル様子無シ今ニモ退散スルノ有様ナレハ氏ハ何トスヘキヤト云予曰ク先刻ヨリ吹キ蜜シ給ヒシヤ斯ルハ施セハ止ル事モ有レハ急キ吹キ蜜スヘシト器物ニ蜜ヲ入レ^巢箱ノ前ニ至ルヤ最早蜂ハ騒キ出シテ見ル中高ク群上リテ用意ノ「ラッパ」ニモ止ル様子無キ故氏ハ竿ニ付ケタル「ラッパ」ヲ其儘待テ群蜂ニ先達テ走ルト雖モ蜂彌ヨ羽早シ且隣家又隣家ノ露地モ圍ヒ堅固ニシテ直ニ行事叶ハス門前ヘ廻リテ案内ヲ乞フ其内ニ行未知レ然レハ近隣四五軒ノ露地ハ念ニ入レ尋ルト雖モ知レサレハ空ク歸宅シテ惜シキヲ爲シタリト云予モ共ニ嗚呼惜ヒ哉ト歎ス其時氏ハ今退散シタル^巢箱ノ前ニ王蜂ノ片羽喰ヒ切ラレテ這ヒ歩行モノヲ見出シ拾ヒ取リ予ニ見セテ儘王蜂ナルヘシト云又先刻蜂ノ退散ノ時ヨリ氏ノ妻君モ共ニ出テ注意シ見給フニ今又同人モ^巢箱ノ前九尺斗ノ所ニテ王蜂ヲ拾ヒテ是モ儘王蜂ナルヘシト云フ之ヲ見ルニ疑モ無キニツ共王蜂ナリ是ハ全身無難ノ様ニ見レハ強ク整レタルモノカニツ共動クノミニテ次第ニ弱リ死セシナリ三人共實ニ奇異ノ思ナシケル爰ヲ以テ見ルハ今退散セシ群蜂中ニハ必定王一羽有リ先ノ日斃レタル一羽ト合テ四羽ノ中一羽ハ前日織田氏ヨリ賞ヒテ入レタルモノナレハ儘三羽一集ニ出テタルト確信ス如此事ハ未ダ西説ニモ聞カスト雖モ判然タル證據ナリ

第十八章

○又問 然ラハ大ナル蜂群分封シテ樹本ノ二三ヶ所ニモ蠢鬪スルヲ有リ若シ王蜂ノ別々ニ出ル圖リナルモ一時ニ成リタルモノナランカ

答フ 然リ前方ハ是ヲ知ラスシテ取テ一個ノ巢箱ニ皆一集ニ移シテ飼育シタルモ其後ハ別ニシテ二箱三箱へ移スナリ若シ知ラスシテ一集ニ移サハ退散セストモ王蜂ハ一羽ノ外ハ整殺サルナルヘシ

第十九章

○又問 分封ニ蜂數至テ少キ者ハ用ニ達タサルヘキヤ

答 金澤市小立野一本松町森氏ハ理化學ノ先生殊ニ植物モ桑茶ノ島多シ氏モ養蜂熱心家ナルニ先年分封ノ蜂僅ニ一合斗ノ者ヲ移シ飼育シ給フ其中ニ王蜂モ有リ働蜂モ三性揃フ故捨ツヘキニアラストテ毎モ絶ヘス蜜ヲ補助スルニ漸ク三四寸斗ノ巢ヲ三枚斗造リ兒蜂モ産ト雖モ繁殖セス冬ニ至ルモ絶ヘス蜜ヲ補助スルニ無難ニ越年ス春ニ至テ俄ニ繁殖シテ五月ニ至リ分封三回ス皆蜂多ク出テ繁殖ス其後採蜜モ此一箱ヨリ二十余斤ヲ收ムトナリ飼養者ノ注意ニ依テ氏ハ今猶其子孫ノ蜂ヲ數箱飼育セリ

第二十章

○又問 金澤市長町四番丁織田氏ノ親蜂三箱ヨリ九回分封スルニ新箱へ移スモ皆逃出テ直ニ止ルモノ無ク取テ入レハ又退散ス右九巢ノ蜂二十余度逃出シ氏モ養蜂熱心家故初メヨリ親巢三箱求メ來テ新箱多ク製シテ分封ヲ待テ取テハ移スニ斯ク數度逃出シ行未知レサルモ有リ最早心力勞レ近隣ノ圍内ヘモ數度蜂ノ爲メニ立入ル事ナレハ氣ノ毒ニ思ヒ如何シテ可ナルヤト問

答乃チ往テ見ルヘシトテ彼所ニ至リ是ヲ見ルニ庭内所々ニ巢箱ノ臺ヲ造ルニ高サ三尺斗ニシテ各屋根有リ其所ニ据置ト雖モ皆逃ルト云予曰ク何ニ因テ斯ク日光ノ直曝スル所ニ置給フヤ氏曰ク養蜂改良説

ノ第一ニ米國オハイオ州ル―ト氏ノ養蜂場トテ圖ノ出テタルニ習テ造リタルト云予曰ク西洋ノ説ハ信シテ疑ハスト雖モ彼ノ圖ハ實際ノモノトハ爲シ難シ如何ト云ニ即今清涼ナル室内「華氏」ノ七十度ヨリ八十度ノ時其日光ノ直曝ノ巢箱内日中ニ何度昇ルヤ我金澤ニテモ極暑ニハ室内九十二三度昇ルコト有リ蜂ハ今ヨリ此温度ニテ極暑ニ至ラハ巢箱ノ巢脾ハ解テ落ルモノト先知シテ退散スルナリ急キ殘リノ新巢ヲ屋腰等ノ日陰へ移スヘシト云夫ヨリ屋腰土藏腰ニテ日光ノ當ラサル所へ移スモノハ皆退散セスシテ繁殖シタリ

第二十一章

○又問 改良巢箱ニ巢礎ヲ用ニ其可否如何

答 巢礎ハ無用ノ物トス如何ト云フニ分封ノ蜂ヲ古巢箱へ移スニ巢ノ跡右ニ有レハ新巢左ヨリ始ム又左ニ跡有レハ右ヨリ始ム又新箱ニ近頃新巢三四枚モ造テ逃去リタルモ其巢ノ儘ノ所へ移サハ良キ巢礎成ルニ蜂ハ是ヲ用ヒスシテ脇ヨリ巢ヲ造リ初ルナレハ西洋人ノ世話過シト思考セリ空櫃ニ蜜ヲ塗テ分封ヲ移スニ毎モ苦無シニ巢ヲ造ルナリ

第二十二章

○問曰 蜜蜂ノ飼養第一ノ混雜ナルハ逃去ルノ一條ナリ是ヲ防ク術アリヤ

答 近年迄是ヲ防ク術無カシニ或友人ノ發明ニテ蜂箱ノ入口ヲ別ノ板ヲ以テ縦一分五厘トシ横何程ニテモヨシ外ヨリ釘ニテ打付ヘシ蜂ノ逃去ルハ何時ニテモ逃去ル者ニアラス分巢ヲ移シタル近日ト秋

冷ニ至リシ時ハ逸去ルノ患ヒ度々ナリ飼養者心ヲ付テ見ル時ハ前以テ蜂ノ色黒クナリ働様モ常ト違ヒシテ見テ箱ノ量ノ輕クナル等ニテ追付逸ントスルヲ察セハ直ニ右ノ入口ニスヘシ然レキハ不日逸去ントノ一時ニ騒立ツモ其儘ニ捨置キハ働蜂ハ全ク出ルモ王蜂ノ逸出ルコト無ケレハ一時間モ立タサル中ニ戻リ入ルナレハ必々驚クヲ無ク見テ居ルヲ良シトス寒冷ニ至レハ翌年ノ春ニ至ルモ逸去ルコト無キモノナリ右二度ノ季節ニハ乞度心ヲ付テ飼育セハ大概ハ逸去ル事無カルヘシ自宅ニ飼養スル蜂七月十日頃採蜜セシニ其量多シ併大暑ノ時故ヘ若シ逸去ル事モ有ノカト察スル中十三日午前十時頃俄ニ騒キ出シ將ニ逸ントスル有様ナレハ直ニ右ノ入口狹メ板ヲ以テ働蜂ノ少々痛ムヲム不厭入口ヘ釘ニテ打付シニ其入口ヨリ働蜂ハ水ヲ流ス如ク群ヲ出テ暫時ニ不殘出タリ其時箱ノ入口ヲ伺ヒ見ルニ中ニハ王蜂ト黒蜂而已殘レリ倍テ出タル働蜂ハ庭前ノ樹間ヲ鳴リ渡ル故ヘラツフ。ヲ所々ニ出スト雖モ夫レニモ止ル様子モ無シ十分時間斗ニシテ群蜂次第ニ舞下リ巢箱ノ戸ニ蠢雷シ退々箱内ニ入ル蜂嵩四升斗有リ一時間斗ニシテ全ク入りテ其後出ルコト無ク元ノ如ク繁殖セシナリ倍其以前ニ近日ノ採蜜セシ人々十人斗ナレハ急ニ端書ヲ以テ右ノ次第ヲ報知シ豫テ嚙シ置タル如ク巢箱ノ入口用心シタマヘト云フ爰ニ長町五番丁野崎氏ノ蜂モ其砌採蜜セシ故ヘ同氏ヘモ報知セント行處ニ門前ニテ息子ニ出合右ノ嚙シ残り無ク語ルニ歸宅シテ其通り入口ノ狹メ板打付タル處翌日蜂騒キ出シ程無ク來テ巢箱ノ戸ニ止リタルヲ其儘詠テ居レハ宜シキモノヲ折惡敷主人モ息子モ不在ナレハ妻君ハ蜂ノ逸ルト心得近隣ノ人ヲ頼テ右ノ巢箱ノ戸ニ附着シタル蜂ヲ新箱ヘ移シ入口ヲ密閉シ置タリ亭主モ息子モ歸リ來テ露地ノ内西ノ方元ノ巢

答 切取タル巢脾ヲ分離器ニテ振出スハ最も良シ日熱ニ曝露シテ自然ニ垂シタルト有レバ決シテ成リ難シ予ノ垂レ蜜ヲ採ル法ハ大ナル瓶ノ中ニ掛籠ヲ置其中ヘ切取タル巢脾ヲ入レ瓶ノ蓋ヲシ其上ニ澁紙ヲ被セ繩ニテ卷キ瓶ノ儘大暑ノ日光ニ直曝スレハ蜜ハ自然ト垂ルナリ斯セサレハ香ニ付テ數万ノ蜂群ヲ來テ忽巢脾ノ蜜ヲ奪ヒ取り其上垂タル蜜ノ中ヘ蜂落テ溺死スルモノ夥シ

第二十七章

○問曰 改良說ニハ蠟ヲ製スルニ巢脾ノ崩潰シタルモノヲ麻袋ニ入レ熱湯中ニ沈ムルキハ蠟ハ溶解シテ水面ニ浮フ云々ト有レバ其通りニハ成リ難シ如何シテ可ナルヤ

答 蠟ヲ製スルニハ斯ク袋ニ入レテ「華氏」ノ二百十二度ノ熱湯ニ煮ルル蠟半ハ出テ半ハ出テサルモノナリ先年内田免事氏簡易ナル機械ヲ用ユ氏ノ發明カ又ハ紀弱ヨリ習ヒ來ルモノカ其機械ハ(第三圖ヲ見ルヘシ)袋ノ底ニ木口八分長カ八寸斗ノ棒ヲ一本繩ニテ結ヒ付ケ置キ袋ノ中ヘ巢脾ノ崩潰シタルモノヲ入レ袋ノ口ヘモ同シ棒ヲ結ヒ付其儘棒ヲ以テ熱湯ニ入レ煮ルル暫時ニシテ湯ノ上面ヘ蠟ノ出ルヲ見ハ其棒ヲ右ト左ヘ熱湯ノ中ニ絞レハ忽チ浮ミ出ルナリ倍出タル蠟ヲハ金杓子ニテ汲ミ取り傍ノ鉢ニ水ヲ置キ其中ヘ放冷シ浮ミタル蠟ノ盡ルニ至ラハ前ノ如ク絞り出スヘシ斯クセサレハ蠟ハ糟ノ中ニ附着シテ捨ルニ至リテハ惜シキモノナリ袋中ノ蠟全ク盡クルニ至ラハ入口ノ繩ヲ解テ糟ヲ出シ見ルヘシ冷テモ塊ルコト無レハ蠟ノ盡ルト知ルヘシ如此何度ニテモ巢脾ヲ袋ニ入レテ煮ルヘシ倍全ク放冷シ終ラハ水中ヨリ取出シ清水ニ洗ヒ置鍋モ洗テ水ヲ少シ涌シ蠟ヲ再度煮テ表面ニ浮フ汚物ヲ取ヘシ夫ヨリ

冷シ置凝結セハ裏ナル汚物ヲ削リ取ヘシ先年養蜂圖解ニテ蠟ノ製造機械モ見タリト雖モ西洋ノ物ハ貴重ニ過テ用ヒ難シ

第二十八章

○又問 同說七十七丁七行目ニ或ハ甲箱ヨリ王臺働蜂ト共ニ巢牌榧ヲ乙箱ニ移シ尙巢礎ヲ裝附セル巢牌榧ヲ加ヘ若シ乙箱ニ働蜂ノ數少キハ日中少時甲箱ヲ他所ニ移シ其跡ニ乙箱ヲ置ヘシ然ルキハ甲箱ヨリ出タル働蜂以前ノ處ニ歸リ來テ乙箱ニ入ル凡半日モ斯クスレハ充分働蜂ヲ得ヘシ而シテ後乙箱ヲ他所ニ轉スト有可否如何

答 其說全ク空論ナリ實際經驗シタル者ノ爲シ得ヘキ業ニアラス前ニモ述タル如ク夜中行ヒテ吹蜜ニテモ施サハ兎モ角モ日中ニストハ抑蜂ノ爭鬪ヲ知ラサル人ノ斷ナリ

第二十九章

○又問 同說七十八丁目ノ初メニ或ハ甲箱ノ蜂ヲ悉ク乙箱内ニ振落シテ直ニ他所ニ移スモ可ナリト有ルハ如何

答 前說ト同シ爭鬪ハ勿論程無ク退散スヘシ小兒ノ說ナリ

第三十章

○問曰 同說第十四圖ノ覆面ハ如何

答 可ナリ併テ用ル覆面ハ今少シ丈夫ナリ前年内田氏(第四圖ヲ見ルヘシ)ノ造リタル物ニテ形狀擊

劔者ノ假面ニ似タリ顔ノ廻リハ椶物細工ニシテ目ノ所ハ眞鍮ノ線ニテ織タル物ヲ用ヒ夫ヨリ下ハ板ニテ製ル頭ヨリ後ロ其外唐木綿二重ノ帽子ニテ良シ予ハ先年金澤市鷹匠町北川氏ノ飼育スル處ノ固定巢箱ノ蜂ヲ六月下旬亭主不在ナレト依頼ニ由テ採蜜ス午前九時頃一巢切採同十一時頃又一巢切採タルニ前ノ時モ蜂騒キタルニ第二回メノ巢ヲ切取ニ法ノ如ク三分ノ二ヲ切り一ヲ殘ス圖リノ處此巢ハ存外巢ノ方ニ兒蜂多キ故是又法ノ如ク竿ト柱ヲ用ヒテ鉤ルナリ然ルニ鉢ニニ杯蜜ノ充滿シタルモノ有リ一杯兒蜂入リタル有リ彼是スル中庭内十余箱ノ蜂羽音ニ乘シテ騒動シ巢箱ノ邊ハ恰モ黒煙ノ如クニテ巢箱ノ在所ヲ鉢ノ在所モ見失フ計ナリ斯ルキ鉢ニ入レタル蜜ノ位置ヲ動セハ蜂ハ去ルモノナレハ是所ヨリ十五間斗外ナル桑園中ニ右三鉢ヲ移セハ果シテ蜂ハ滅シタリ其所ニテ鉤巢ノ用意ヲ爲シ來リ全ク鉤終テ巢箱ハ元ノ如ク直シ室内ニ入ルナリ先ニ數万ノ蜂面ニ飛付音凄シキモノナリ若シ弱キ面ニテ有ラハ何十ヶ所整ストモ斗リ難シ左右ノ手ニ手袋ニテモ掛レハ宜キナ何モ掛サレハ數十ヶ所整レタリ然レモ若荷ヲ絞リ其液ニテ洗ヒタレハ立所ニ痛ミ去タリ故ニ何ノ苦ニモナラス直ニ蜜ヲ搾リ蠟モ製シテ歸宅スルナリ跡ニテ聞ケハ同氏ノ妻君ハ雨戸障子ヲ全ク立テ玻璃障子ノ内ヨリ巢箱ノ邊リヲ見ルニ五六間四方ハ黒煙ノ如クナル中ニ立テ優々トシテ巢ヲ鉤ル杯トハ連年馴レタル業ナレハトテ或ハ感シ又ハ危キ事ト奇異ノ思チナシケルト云フ

第三十一章

○又問 採蜜法垂レ蜜ハ上等ナレト手數多シ外ニ簡易ニシテ上等ヲ取ル法無キヤ

答 予ノ近年ノ法ハ先巢牌ヲ切取り裏表トモ能ク検査シ少シニテモ蜂兒有ラハ取去リ花粉モ成ル可ク切
除ケ機械ニ掛テ搾ルナリ予ノ機械ハ至テ簡易ナリ(第五圖ヲ見ルヘシ)松ニテモヨシ幅九寸長サ二尺一
寸厚サ二寸ナル板ヲ臺トシ兩端ヨリ二寸宛内ニ入テ幅各四寸厚サ一寸五分ノ柱ヲ兩方ニ立柱ハ上ノ方
ニテ次第ニ細ソク造リ上ノ端ニテ二寸ニナリ高サ一尺五寸ナリ上ニ棧一本厚サ一寸五分幅二寸長サ一
尺八寸兩端柱ノ所ニテ各臍穴ヲ明ケ柱ニ被セ組合スナリ兩柱ニ上ノ棧ヨリ五寸下コテ九穴直徑一寸二
分ヲ明ケ此穴ヨリ高二寸五分ノ處ニ直徑三分ノ九穴ニ杭ヲサス長サ三寸柱ト柱與直ニ立ルヲ良トス偕
機械ヲ据置キ臺ノ上ハ蜜ヲ入ル可キ鉢ヲ置キ至テ丈夫ナル布三尺斗一幅ナルヲ右柱ノ前後ノ穴へ通シ
後ロノ穴ノ外ニテ布ノ端三寸斗曲ケ木口八分長八寸斗ノ棒ヲ内ニ横ニシ麻繩ニテ幾度モ巻テ結ヒ付
ケ置夫ヨリ布ヲ廣ケ其中ハ巢牌ヲ入レ手ニテ崩潰シ布ニ包ムニ兩縁ヲ合セ少シ疊ミ込ム様ニシ夫ヨ
リ布ノ端ヲ前ノ柱ノ外ニテ後ト同ク棒ニ結ヒ付ケ左右何レヘナリトモ棒ヲ手ニテ廻シ搾レハ蜜ハ垂リ
テ鉢ノ中へ溜ルナリ斯クスレハ後ノ方ハ杭ニテ棒廻ヒ止リ前モ手ヲ休メ度ハ杭ヲ指テ止ルナリ布ヨリ
垂ル蜜ハ手ノ指ニテ撫落スモヨシ夫ヨリ杭ヲ抜き棒ヲ元へ戻シ布ヲ開キ中ナル巢牌ヲ再度手ニテ崩潰
シ又搾ルヘシ如此三度斗ニテ蜜ハ全快ク採レルナリ

第三十二章

○又問 其蜜ヲ精製スルニハ如何シテ良キヤ

答 右ノ蜜ヲ瓶ニ入レ置ハ汚物上面ニ浮フヲ汲取テ唐木綿ノ袋ニ入レ垂セハ糟ハ袋ノ中ニ残り上等ノ

蜜ハ垂ルナリ採蜜シテヨリ早クスヘシ遅クナレハ結晶シテ垂リ難シ斯クシテ製シタルモノハ夏日ト雖
モ白色ニ結晶シ最上品ナリ右ノ袋ヲ幾個モ并置キ糟ハ其儘蜂箱ニ入レ蜂ニ吸スヘシ袋ヲ洗テハ又漉ス
ヘシ

第三十三章

○又問 採蜜ヲ製シ蠟ヲ製スルキ室内ニ蜂多ク入り製蠟ノ鍋ニ多ク飛入テ死ルコト有リ如何シテ宜キヤ
答 前年三社古市氏ニテ採蜜シ蠟モ製スルニ室内ニ蜂多ク入テ致方無シ蚊帳ヲ鈎テ其中ニテ製スルモ
前ニ切採リ風呂柵押シ入レ等ニ入置タル巢蜜ニ戸ノ立テ附ケヨリ蜂多ク入り羽音ニ乘シテ庭内五六箱
ノ蜂次第ニ群集シテ室内烟ノ如シ後ニハ隣家ノ室内迄亂入ス其時火鉢ニ蓬ヲ薫セシニ立所ニ蜂ハ立去
リ一羽モ殘ラス成リタレハ隣家ヘモ其由話テ同事ニ爲シタリ爰ヲ以テ見ルキハ巢箱ヲ移スニ用心スヘ
シ隣家等ノ烟屨々掛ル處ニテハ蜂退散スト知ルヘシ

第三十四章

○又問 今年蜂ノ分封ヲ取テ移シタル巢箱ヨリ夏秋ノ間ニ又分封スルコト有リヤ

答 前年金澤市池田町鹿田氏ニ五月分封シタル庭内ニ据置ニ大暑ニ至リ其巢極盛ニテ分封セシヲ移
シ置ト雖モ退散ス又長町一番丁與村氏ノ蜂モ同出タレトモ退散スト聞往テ見ルニ跡ニ王臺二三個有ル
故氏ト謀リテ王臺ヲ取捨タリ斯クセサレハ盛ナル巢箱分封ノ後忽衰ヘ又分封シタル新巢モ多分逃去ル
モノナリ其外ニモ折々有ルコトニ我地方ニテハ是ヲ孫巢ト云改良説ニモ有レトモ珍シキ事ノ様ニテ西

洋ニテモ開カス杯ト有ナリ

第三十五章

○有志問 前年紀勃ヨリ内田氏ノ携へ來リシ蜂ノ子孫金澤ニ有リヤ形狀ハ如何
答 彼蜂ハ金澤ニ舊來飼育スル蜂ト形ハ少シモ變ラスト雖モ至テ鋭クシテ人ヲ螫スト甚シ之ニ依テ取扱ニ困リ果テ如何ナル人モ近寄ルヲ恐ル故ニ自然ト疏遠ニ成テ次第ニ消滅シ程無ク死絶ヘ其蜂ノ子孫今ハ無シ

第三十六章

○又問 右ノ如キ鋭キ蜂ヲ穩ニシテ飼フ法ハ無キヤ
答 竊造ハ近年其法ヲ發明シタリ故ニ所々ニテ是ヲ施ス明治廿二年金澤市河内山氏ノ縁家神原氏ノ蜂鋭クシテ近寄ルヲ能ハス故穩ニ成ル法有ラハ施シ給ハント云併巢箱ノ戸ヲ取ルキハ必五六ヶ所モ螫ス故ヘ用心シ給ヘト云逆モ日中ハ危キ故黄昏ヲ待テ最早蜂ノ靜ルヲ伺ヒ茶碗ニ一杯ノ蜜ヲ持行箱ノ戸ヲ取リ水ニテ口中ヲ清メ蜜ヲ殘ラス吹キ掛ケ戸ヲ立テ置ナリ明朝モ如此蜜ヲ吹キ給フヘシトテ歸宅ス後日同氏ニ面會シ蜂ハ如何ナリシヤト問河内山氏曰ク彼法ヲ施シテヨリ蜂ハ穩ニナリ最早人ヲ螫ス患ヒ無シ奇妙ノ法ヲ授カリシト云

第三十七章

○又問 巢箱ヨリ逸去リタル蜂ハ最早歸リ來ルヲ無キヤ

答 前年金澤市真古寺町野本氏ノ蜂午前八時頃騒キ出シ全ク逸去タル故致方モ無ク巢箱ヲ下シ巢脾ヲ皆切取シニ少々ノ蜜モ有リヤ無キヤ至テ衰弱ノ姿ナリシニ午後ニ至リ蜂皆歸リテ巢箱ノ有シ所ニ群集ス同氏はヲ見テ空巢箱ヲ本ノ所ニ据ヘ置ハ蜂ハ殘ラス箱内ニ入蠢團ス翌日又騒キ出シテ退散ス其後ハ來ルヲ無シト云 又曰ク金澤市森岡村氏ノ蜂ハ明治廿四年秋騒キ出シテ全ク逸去タリ同氏ハ病氣故其儘ニシテ巢箱モ置キタル處日數廿日メニ蜂ノ羽音頻ニ聞ユル故出テ見ルニ群蜂本ノ如ク歸リ來テ全ク巢箱ニ入ル去リ乍ラ元ノ巢脾ニ入ラスシテ別ニ巢ヲ造リテ入ルト云隨分養蜂家ニテ珍ラシキ事ナリ日數ト云ヒ元ノ巢脾ヲ捨テ箱内ニ別ニ新巢ヲ造ルトハ全ク外々ノ巢箱ヨリ逸來テ入リシモノカ併退々衰弱シテ後ニハ消滅スト云何レノ蜂トモ判談爲シ難シ

第三十八章

○問曰 固定巢箱ヨリ採蜜スルニ蜂箱ノ戸ヲ取リ巢ノ下ヘ鉢ヲ宛テ夫ヨリ庖丁ヲ以テ巢ノ古キ方ヨリ大概三分ノ二ヲ切取ルヲ定法トス併此際鉢ノ中ヘ溜リタル蜜ノ内ヘ蜂多ク入テ溺死ス如何シテ宜キヤ
答 我地方ニテ十年斗前迄ハ右ノ通りノ採蜜方ナレ其後ハ是ト異リ先ツ蜂箱ノ戸ヲ去リ五夕斗ノ蜜ヲ蜂ニ吹キ掛ケ戸ヲ立テ夫ヨリ蜂箱ヲ逆様ニ成シ戸ヲ開ケハ巢脾ハ下ヨリ生ヘタル如クナリ何ノ方ニテモ勝手ニ巢ヲ切取リ巢箱ノ外ニ鉢ヲ置キ其中ヘ入ルヘシ此時蜂ハ上ノ方少シニテモ巢ノ無キ方ニ蠢團シテ待チ思ヒノ外ニ靜ナルモノニテ溺死スル患ヒ無ク良法ナリ倍何程ニテモ切終ラハ巢箱ノ戸ヲ立テ今迄ノ箱ノ地ヲ元ノ如ク天ト成スヘシ此時蜂ハ切殘リタル巢ニ取付キ其儘箱ノ内ニ流レタル蜜ハ暫

時ニシテ吸ヒ取蠟ノ屑杯モ取捨忽チ巢箱内ヲ清潔ニスルナリ分封止ミテ後廿日斗ニテ採蜜セハ兒蜂ハ大概無キキナリ切採リタル跡ニ直ニ新巢ヲ造テ榮ルナリ

第三十九章

○又問 切採タル巢脾ニ兒蜂多ク居ルコト有リ二三年モ切ラサル巢箱ニテ奥ノ方ニ蛆ノ兆候無キニシモアラス止テ得ス切タル巢ノ兒蜂ハ如何シテ長シヤ

答 巢脾ノ上ノ方ニハ蜜ヲ貯ヘ下ノ方ニハ兒蜂ヲ多ク産モノナレハ兒ノ有ル處ノミヲ何枚ニテモ并ヘ右ニ述タル逆様ノ箱ノ内後ロト下ヘ儘ニ取附ク様ニシ并ヘタル巢ヲ被ノ様ナル竿二本ニテ適度ナル處ヲ貫キ儲テ俟タ有ル小竹ノ柱四本ニテ右竿ノ兩端ノ四ヶ所ヲ儘ニ下ヘ押付ケ尤柱ハ天ト地ヘ確然トシテ動カサル様ニスヘシ巢ト巢ノ間常ノ如ク村無キ様ニ直シ全ク釣終ラハ前ニ述タル如ク巢箱ノ地ヲ天ニスヘシ右柱ハ十日斗ニテ巢ノ儘ニ取付クヲ見ハ取リテモヨシ

第四十章

○問 巢箱冬ノ保護方ハ如何シテ宜キヤ

答 我地方ハ雪國ナレハ十一月未タ雪ノ降ラサル前ニ巢箱ヲ米俵或ハ藁コト包ミ出入口少々明ケ置ヘシ成ルヘク位置ヲ動サトルヲ宜シトス寒冷ニ至リ蜂ノ爲メト思ヒ暖ナル室内或ハ雨戸ノ内环へ入レハ方向ヲ失ヒ寒氣ノ爲メ落テ死スコト有リ巢箱臺低ケレハ四尺斗ノ丈夫ナル臺ニ据置ハ雪ニ埋ル程ノ事ハ大概無シ若シ埋ルコト有ラハ堀リ出スヘシ倍雪中ニテモ少シ日光ノサシ晴天ト見ルキハ蜂俄ニ騒キ出シ

テ雪ノ上ヘ恰モ黒大豆ヲ蒔タル如ク多ク落テ凍テ斃ルコト有リ是必何日モ雪吹キ續テノ後ハ有ナリ全ク糞ヲシニ出テ凍ルモノナレハ飼養者之ヲ知ラスシテ其儘ニ捨置ハ一羽モ蘇生スルモノ無シ故ニ直ニ少キ茶篩ヒノ様ナル籠ニ箸ニテ拾ヒ取り火鉢ニ少々火ヲ埋メ其上ニ据ヘ籠内ノ温度「華氏」ノ七十度ヨリ七十五度ニ過キサルヲ良シトススレハ斃テヨリ一二時間ニテ拾ヒタルモノハ全ク蘇生シテ箱ニ入ル三四時ヲ經テ拾ヒタルモノハ蘇生スルコト稀ナリ予明治廿三年ノ大雪ニ蜂一巢全ク箱内ニ斃レタルコト有リ其有様ヲ見ルニ働蜂一升斗雌蜂一羽雄蜂三羽蜜ノ貯四百八十目有リ其死体ヲ見ルニ常ノ倍位ノ形ニテ何レモ水腫ノ有様ナリ十數日ノ雪吹キニ箱外ニ糞ヲシニ出ルコト能ス其爲メニ皆死ト成リタルト思考ス性質規則正シキモノニテ箱中ニテハ糞スル様ナルコトハ譬ヘ死ストモ犯スコト無シト見ヘタリ

題有害物

蜻蛉と蜘蛛や赤蜂油虫捕り盡さずは蜂は衰ふ
粘狐好んで蜂を喰ひに来る網み張り置かば近寄りもせず

題察蜂盛衰

働て花粉あまたに持ち來なは兒蜂も育ち盛なるへし
黒くと蜂の光りて働ず花粉とらすは衰ふと忘れ

明治二十七年五月二十四日印刷
明治二十七年五月三十一日發行

定價十五錢

著者

石川縣金澤市中主馬町六番地

山口 富造

發行人

石川縣金澤市堅町百十五番地

鹿田 三郎

印刷者

石川縣金澤市石浦町二十三番地ノ二

吉本次郎兵衛

發行所

石川縣金澤市堅町百十五番地

菁々堂

